
今夜、風の吹く場所で

ペケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今夜、風の吹く場所で

【Nコード】

N5802D

【作者名】

ペケ

【あらすじ】

この世は気が滅入ることばかりだ。付けたくもない仮面を付けて、みんな笑いたくもないのに笑ってる。けど、仮面を付けなきゃ息苦しくて、生きていけなくて、ほんとにどうしようもないね。でも、僕が唯一心惹かれるものがあるとすれば・・・。

1（前書き）

この小説は作者の処女作となっておりますので、どうか生暖かい目で見守って下さい。

高校の入学式も、2回目になると何の感慨も湧かないものだよ。これは僕が人よりも若干長い高校生活で得た最もいい教訓の1つさ。だから僕はその日学校に行く気にはとてもじゃないがなれなかったんだけど、下宿先の大家さんに促されて仕方なく出席したんだ。彼女、とてもいい人だから、困らせなかったんだよ。

入学式では校長先生やら来賓のお偉いさんの話を5000時間ばかり聞かされたね。あんな長い話をいつたいどこの誰が求めているというんだい？本当に不思議でならないよ。話は長けりゃいいってもんじゃないのにね。

退屈極まりない式を終えた後、僕は一週間前くらいから始めたバイト先へと向かった。コンビニのバイトなんだけど、あれって本当につまらないね。僕がまじめにやってないってからつてもあるかもしれないけど、本当につまらないよ？あまりおススメはできないね。けどこれも仕方ないんだ。学校に行くのにはお金が掛かるからね。誰も出してくれないんなら、自分で稼ぐしかないだろう？

僕は17の時、つまり高校2年の時、学校を退学した。理由は言わなくてもいいかな？あんまし格好いい理由でもないんでね。それで18の時、つまりこんときだけどさ、別の高校に入学し直したんだ。それがさっきの高校さ。

クラスの奴らをちらっと見たけど、なんて言うのかな、僕とは合いそうになかったな。あまりああいふ騒々しい連中は好きじゃないんだよ。ジロジロこつちの方を見てきては、ひそひそ話を始めたりするだろ？嫌いなんだよね、そういうの。分かるだろ？

夜中の9時にバイトが終わって、僕はバイクで下宿先に帰った。好きなんだよ、バイク。15の時から乗ってる。

下宿先は築20年くらいのもので、少し古びたところで、僕以外に高校生が2人、それと大家さんが住んでいた。この大家さん、若くてきれいな人なんだけど、どうやら独身みたいだった。でも薬指に指輪してたから、細かいことは訊かなかったよ。訊くのは野暮つてもんさ。ちなみに僕以外にここに住んでる2人だけど、顔も見えたことないね。食事はそれぞれの部屋で勝手に食ってたし、僕は普段いないし。それでも1つ屋根の下に知らない人間と生活するってのはけっこう精神的に来るぜ？僕が神経質なだけかも知ないけど。じゃあなぜ僕がそんなところに住んでるのかって言うと、さっきも言ったようにお金の問題さ。それ以外にないね。

それでこの下宿先に住み始めたのは春休みになってからで、その前は前の高校近くの下宿、ヒドイとこだった、思い出したくもないね、その前は実家のアパートに住んでた。母さんと妹との3人でね。僕と母さんの仲はあんまりよくなかったな。あの人、まだ若かったから、2人の子持ちつてのがイヤだったんだろうな。小さな頃はいつもあの人になぶられてたよ。だから僕は16の時、最初の高校に入る時に家を飛び出したんだ。それから一度も母さんと妹には会ってなかった。母さんには何回か電話をしたけど、ほとんど親子の会話しやなかったな。役所の受付みたいな感じの、事務的って言うかさ。そうそう、僕には年の離れた妹がいるんだ。たぶん、そのときは10歳だったと思う。

とても可愛らしくて、賢くて、素直な子なんだ。僕なんかと違ってね。たぶん、君はあんない子を見たことないだろうな。年の離れているせいか、いつも僕にくつついて甘えてきていたな。本当にいい子なんだよ、本当。

でも当時はその妹、美里って名前なんだけど、あの母親と2人で暮らしていたんだ。母親は美里をぶったりはしないけど、あまり可愛がったりはしてなかったと思うな。そう思うととても心配だったけど、その時の僕には、美里のことを考えてられる余裕はなかったんだ。言い訳にしか聞こえないけど。

それで、僕はバイト先から下宿先に戻って中に入ったんだ。キッチンには大家さんしかいなかった。

「お帰り、圭介くん」

大家さんは僕に気付くと笑いかけてきた。僕は軽く頭を下げた。

「お客さんが来てるわよ」

「客？」

僕は訊き返した。

「ええ。部屋で待ってるわ」

大家さんはにっこり笑った。

「はあ」

僕は曖昧に返事をする、二階の自分の部屋に上がった。

僕に客？そんなもの、見当も付かなかったね。僕をわざわざ訪ねてくる奴なんているのだろうか？けど大家さんも大家さんだ。そんな奴を勝手に部屋に上げるなんて。彼女、どこか警戒心に欠けるところがあるんだ。

僕は自分の部屋のドアを開けた。どんな奴がいるのか用心しながらね。

ドアを開けて部屋の中を見た時、僕は本当に驚いたよ。

僕が使ってるベッドの上にそいつはいたんだ。ブカブカのパジャマを着て、ベッドにちょこんと座っていたそいつは、僕に気付くとパツと顔を輝かせて、こっちに手を振ってきたんだよ。

「お兄ちゃん！」

誰なのか、理解するのにしばらくかかったよ。あまりにも混乱してたからさ。

そこにいたのは、僕の妹、美里だった。

「なんでお前がここにいるんだ？」

僕は少しどぎまぎしながらドアを閉めた。知らないおっさんがいるよりも予想外だったんだ、冗談抜きに。

「えへへ。来ちゃった」

美里はベッドから降りると僕に駆け寄って来て、抱きついてきた。みぞおち辺りに頭がぶつかって、危うく息が詰まるところだったよ。僕はまだ戸惑いながらも、美里の姿を観察した。

美里は全然変わっていなかった。2年間で少し背が伸びたくらいで、他は僕の中にある美里そのものだった。黒くてサラサラした髪、くりつとして潤んだ大きな瞳、透けるような白い肌。平均より若干小さいめの彼女は、僕の胸に顔をうずめ、昔と同じように甘えてきたんだ。2年間まったく会っていなかったなんて嘘みたいだったよ。

僕は美里の頭をそつと撫でながら、「どうしてお前がここにいるんだ？」ってまた訊いた。妹は抱きついたまま、まだ頬をこすりつけていた。僕はやれやれと肩をすくめた。何を訊いていいのやらさっぱりだった。そこで質問を変えた。

「なんなんだ、その格好」

彼女の着ているパジャマをよく見ると、それは僕のだった。

「ん？」

彼女はやつと僕から離れると、「えへへ」と照れ笑いだした。

「パジャマ持つてくるの、わすれちゃった」

美里はパジャマの上しか着ておらず、パジャマの裾が膝辺りまできていて、手のひらはまだ袖の中にあつた。

「それで、なんであなたがここにいますか？」

僕はバカ丁寧な口調で美里に言った。ええと、これで何回目だっけ？けど妹は何も言わずに、自分のバッグの中を漁りだした。服なんかを引っ張り出した後、一番奥からくしゃくしゃの便せんを取り出し

た。

「コレ」

僕はそれを受け取って読んだ。便せんにあつた言葉は一言だけ、
「さよなら」だった。

僕は自分の目を疑ったね。まさかと思ったよ。その筆跡には見覚えがあったんだ。

「母さん…か？」

ああ、声がどうしようもなく震えてやがった。妹は、答えてほしくなかったけど、「うん」と答えた。

「母さん、どこに行ったんだ？」

「昨日帰ったらテーブルに置いてあったの。お母さん、どっかに رفتちやっただと思う」

美里はまるで気にしてないかのように振る舞ったけど、彼女の声もかすかに震えていた。

その時ちようど、僕の携帯が鳴った。だいたい想像はついてたけど、やっぱりあの人だった。

「ごめん。ちよつと」

僕は部屋を出て、キッチンを通って外に出た。途中何も知らない大家さんが僕に笑いかけたのが、妙に僕をイラつかせたな。

僕は電話に出た。

「もしもし」

『あの子、来てる？』

相手を確認めもせず言いやがった。

「どういうことだよ！」

『そう…。ならいいわ』

母親の声が冷静そのものだったことが、僕の怒りを掻き立てた。

「なんで美里を置いて出て行ったりしたんだ！それでも母親かよ、あんた！」

馬鹿デカイ声を出したもんさ、我ながら。

『…そんなこと、圭介が言えるの？』

ハッとした。そうだ、僕は妹を置いて逃げ出したんだ。それを言わ

れると、返す言葉がないことが、腹立たしかった。

『いいわ。そんなことはどうでもいいのよ。頼れるのは、アンタしかいなかったからね』

やはりこの人にこの住所を教えるべきじゃなかったって、僕は後悔したね。書類なんかの手続き上、仕方なかったんだけどさ。

『その子のことは任せるわ』

「ちよつと待てよ！何言ってるんだ！」

ずっと声が裏返ってたよ、情けないことに。

『疲れたのよ…』

「え？」

『母親であることに、もう疲れたの…』

「ふざけるなよ！美里はどうなる！」

『…もう連絡して来ないでちょうだい。美里のことを頼むわ』

「ちよ…待てよ！　クソッ！！」

電話が切れた。あっけなく切っちゃったんだよ、あの女。

受話器から聞こえてくるツーツーって音がイヤに大きく感じたね。言つとくけど、あの女は僕と美里の実の母親なんだぜ？それがさ、なんだよ…。

僕はポケットからタバコを取り出して火をつけた。でもね、全然ダメだった。

「クソッ！」

僕はタバコを地面に叩きつけて、足で揉み消した。タバコの形がなくなるまで、何度も何度もね。

部屋に戻ると、美里はまた僕のベッドの上に可愛らしく座っていた。僕が何を言うべきか迷っていると、

「ごはん食べた？」

妹は出し抜けに言った。

「え？あ、ああ」

晩飯ならバイト先で、売れ残った弁当を食べたな、確か。どうしてもいいけど、まづかった。

「美里は？」

「食べた」

美里はドアを指差した。

「おばちゃん」と

どうやら大家さんにごちそうになったらしい。後でお礼を言わなきゃなって思いつつ、しかしおばちゃんはないだろうって苦笑した。とりあえず僕は机のイスに座って、これからのことに思いをはせた。美里を住まわせることに異論はなかった。それは全然いいんだ。あの女にはもう任せるわけにはいかないから。しかし問題は生活費だった。そんなとき僕の生活はかなりギリギリで、下宿代の振り込みを大家さんに待ってもらってる状態だったんだ。そんな中で2人分の生活費をまかなえるだろうか？

僕の考えてることが分かったのか、美里は心配そうにこっちを見ていた。今のバイトだけじゃ足りないなこりやって、迷う暇なんてなかった。

僕は美里に笑いかけた。その意味を知ってか知らずか、美里も笑った。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「お風呂入る」

「あ、ああ。…え？」

僕は間抜けな声を出した。いきなりの美里の発言に僕はおいに困ったね。

「な、何言ってたんだ、美里？」

「え、昔は一緒に入ってたでしょ？」

確かに一緒に風呂に入ったことはあるが、おれは美里が5歳のときまでだぜ？それから僕が出て行くまでの間、一度も入らなかったんだ。

「お前、もう10歳だろ。1人でお風呂に入れるだろ」

けど、妹は聞かないんだ。

「や。一緒に入る」

昔は素直だったんだけどな。やっぱこの子も年を取るのか。なんか普通とは逆みたいだけど。このくらいの年になれば、普通兄貴を嫌がるはずじゃないか？いくらなんでもさ。

それでも美里は僕の目をじっと見て訴えかけてくるんだ。そしてだんだん、今にも泣きそうな顔になってくるんだよ。正直、僕は美里のこの表情に昔から弱い。

思えば、美里には2年間も寂しい思いをさせていた。家を飛び出したとき、美里には一言も言っていなかったから。美里のことだ、きつと寂しがって、すごく泣いたに違いない。そのせめてもの罪滅ぼしかもしれないな、これは。

「…分かったよ」

僕がそう言った途端、美里の顔にいつもの明るさが戻ったね。いつもこうなんだよ。僕はそれに、いつも騙されてるんだけどね。

この下宿の風呂は共用で、僕らが下に降りていった時、ちょうど大家さんが風呂から出て来るところだった。

「仲良しのね」

大家さんはいつもみたく笑った。濡れた髪をバスタオルで拭いている姿に、僕はドキツとした。男ばかりのこの下宿で、この人は大胆というより無防備だ。他人事ながら心配になったよ、実際。

「ご飯、ありがとうございました」

僕は言った。

「いいのよ、気にしなくて」

大家さんは膝をかかめ、妹の頭を撫でた。妹は気持ち良さそうに目を細めて、猫みたいに喉をゴロゴロと、いや、鳴らしてないけどそんな感じってこと。

「可愛い妹さんね」

僕はそう言う大家さんの目が、どこか悲しそうな気がした。

脱衣所に入ると、妹は着ていた僕のパジャマを脱ぎ始めた。

もちろん僕はとっさに目をそらしたさ。いくら兄妹だからって、この子には恥じらいというものがないのかとすら思ったよ。

妹は服を脱ぐと、バスタオルすら持たずに行っちゃった。僕は風呂で妹の髪を洗ってあげた。美里の髪を洗うなんて何年振りだろうな、なんて考えながらさ。細くて柔らかい妹の髪は、僕の指をするりと通り過ぎて行った。力加減がよく分らなかったんだけど、妹は嬉しそうに鼻歌を歌っていたな。

美里の肩や背中を見たら、かなり華奢でやせていた。普通の女の子がどれくらいか知らないけど、それよりも細いと思うよ。ずいぶんと、ひどい生活をしてきたのだろうな。なんせ、一緒に暮らしていたのはあの女だ。美里の身体の弱々しさを見るたびに、あの女への怒りが込み上げてきた。

湯船に2人で浸かっている時も、妹は鼻歌を歌っていた。僕の知らない歌だったな。子供の成長に対して、2年間のブランクはやはり、長すぎた。それをまざまざと見せつけられた気がして、僕はひどく落ち込んだね。

「なんだか楽しいね」

美里の笑顔が苦しかった。

「お兄ちゃん、彼女とかいるの？」

予期せぬ突然の質問に、僕は戸惑った。

「いない」

「そう、よかった」

湯けむりの向こう側の美里の顔がほのかに紅潮したように見えた。

ただ単に、のぼせているだけかもしれないけど。

「いないんだ、よかった」

妹はそう繰り返した。

「なんだよ？」

僕は言った。

「別に」

妹はまた僕の知らない歌を、今度はハミングをつけて歌った。風呂場だからかもしれないけど、とても上手だったな。

風呂から上がると、美里はまた僕のパジャマを上だけ着た。じゃあ僕は何を着ろって言うんだ？

美里の長い髪をドライヤーで乾かしながら、僕は気になっていたことを妹に訊いた。

「美里、学校はどうしたんだ？」

「ん、なにが？」

妹はとぼけた。

「なにが、じゃないよ。学校はどうしたんだい？」

そう、この子は僕の家に来た。てことはつまり、学校には行っていなかったんだ。クソ、母さんはなんであんなことを。

「…いいの。私はお兄ちゃんと一緒にいたいの」

「…」

どの道、そこからじゃ美里の学校は遠すぎだし、何より、そんなお金はなかった。でも…。

「さみしくないのか？友達とか」

「うん」

妹はちよつと考えて首を振った。

「ゆうこちゃんやしほちゃんに会えないのはさみしい。3人でね、いつも遊んでたの。とっても楽しかった。でもね、いいの」

美里はこつちの方を振り向いて、僕の目をまっすぐ見つめてきた。

「お兄ちゃんという方が、いい」

「美里…」

本当、僕はとうになつちまったらしい。美里の言葉を聞いて、僕は泣いちゃったのさ。

2年間も美里をほったらかしていた僕に、美里は変わらない態度で接してくれた。責められてもなじられてもおかしくない僕と、この子と一緒にいたいと言ってくれた。それがなんだか嬉しくて、情け

なくて、僕は泣いちゃったんだ。

突然泣き出しちゃった僕を見て、妹は慌てたみたいだった。オロオロしながら、僕の顔をのぞきこんできたり、頭を撫でてきたり、自分が泣きそうになったりしてさ。その様子がなんだかおかしくて、僕は笑った。そんな僕を見て、美里も笑った。どっちも泣きそうな顔して、2人で笑ってた。

僕はふかふかの美里の頭をポンポンと叩いて、「もう寝るかい？」って訊いた。美里は元気よくうなずいた。

僕の考えでは美里がベッドで寝て、僕は床で寝るつもりだったんだけど、彼女、どうしても僕と寝るって聞かないんだ。仕方なく、狭いベッドの上に2人で寝ることになった。狭い上に、僕は妹と壁の間に挟まれちゃって、ほとんど動けなかったよ。

それで電気を消していざ寝ようとしたんだけど、美里が色々と話しかけてきてさ、なかなか眠れなかったよ。

「それでね、その井上くん、いつも私のふで箱を隠してくるのよ。私が、返してって言っても返してくれないの。ヤになっちゃう」

「それはきつと、その子は美里のことが好きなんだよ」

「違うよ。井上くんは8組の竹中さんが好きだったんだよ。ゆうこちゃんがそう言ってたんだもん」

「そうなのかい？」

「そうなの。竹中さん頭も良くて…かわいくて……算数が得意で……」。

美里の声が小さくなっていき、言葉も途切れ途切れになってきた。そのときもう夜中の11時だったからね。美里は普段そんなに起きてなかっただろうからさ。それによく考えてみれば、美里は僕の下宿先までたった1人で来たんだ。10歳の女の子がだよ。きつと怖くて不安だったんだろな。最初美里に会った時はそこまで考えられなかったけど、改めて考えたら、美里がすごく不憫に思えてきてね。だから僕は、精一杯優しくしてやろうって決めたんだ。

「もうおやすみ」

「お兄ちゃん…」

美里がまどろみながら言った。

「ん？」

「うでまくら…して」

「…いいよ」

美里は僕の腕に頭を乗せて、胸のあたりに鼻をこすりつけてきた。

「いいにおい…」

昔はよくこうして2人で寝ていたな。それがなんだかとても遠い日のことのように思えた。

しばらくすると、彼女は静かな寝息を立て始めた。

「おやすみ」

美里の寝顔に、僕は言った。僕はさらに眠りにくい体勢になっちゃったけど、美里のためなら、安いもんだった。

それからどのくらい時間が経ったかは分からないけど、僕は夜中に突然目を覚ました。なんだか変な音がした気がしてさ、目を覚ましちまったんだ。それからちよつと、違和感みたいなのを感じた。最初はぼんやりしていて気付くのにえらく時間がかかったよ。でも、その日はベッドに1人で寝ていないということに気付いたんだ。

「美里……？」

美里がいなかった。僕はベッドの上に起き上がって辺りを見回した。シーツやらなんやらがぐちゃぐちゃになっててさ、美里が寝ていたところがびっしょりと汗で濡れていた。その冷たい汗に手が触れたとき、背中に寒気が走ってはつきりと目が覚めたね。

僕は部屋を見回した。ただトイレに行ってるだけかも知れないってのに、僕はどうしようもなく焦っていたんだ。そしたら、どこからか寝息が聞こえてきた。

「どこだい？」

暗い部屋の中、耳を澄ませてその寝息を探った。そして見つけた。

美里はベッドのそばの床の上に、毛布も持たずに転がっていた。どうやら暑くて寝返りを打った拍子にベッドから落ちたらしかった。昔からあまり寝相のいい方じゃなかったけど、まさかベッドから落ちるとは思わなかったね。しかもそのまま寝てるし。

僕は妹をベッドに戻そうか迷ったけど、あまりにも気持ちよさそうに寝てたから、僕は毛布を持って彼女の隣に行き、一緒に床で眠った。フローリングの床はひんやりとして気持ちよかった。

そのとき僕は、なんだかとても幸せな気分だったな。うまく説明できないけど、なんだかとても、幸せな気分だったんだよ。

朝、すごい音がして僕は目を覚ました。その瞬間目に入ったのは、驚いたね、美里の寝顔だった。あいつ、僕の上に乗っかって寝てたんだ。どおりで息苦しいと思ったよ、起きた瞬間。

ベッドの横の床の上、僕は折り重なるようになっていた。目覚ましは少しは休めってくらい忙しく鳴り続けていた。美里はそれでもまだ眠っていたね。

僕はその状態から思いつ切り腕を伸ばして目覚ましを止めた。もう一度美里を見て、また目覚ましを見た。

「ま、いつか…」

授業初日のその日、僕は学校に遅刻した。

僕と美里は部屋で2人、もそもそと大家さんの用意してくれたトーストを食べた。とつくに1時間目が始まっている時間だったな。ちなみ大家さんは起こしに来てはくれないよ、当然のことながら。

美里も朝は苦手で、たまにトーストを落っこしそうになっていた。「お兄ちゃん学校行くけど、美里はどうする？部屋で待っておくかい？」

大家さんはこの時間仕事でいなかった。もちろん他の下宿生も。いるのは僕と美里だけだった。

「大家さん、お昼には1度帰ってくると思うけど、それまで1人で大丈夫かい？」

寝ぼけ眼の美里は、半分夢の中にいる感じで、「うん」と答えた。

「そうか」

2人揃って5時間ばかりかけて朝食を終えると、僕は学校に行く準備をして玄関に立った。美里がそれを見送ってくれた。

「本当に1人で大丈夫なんだね？なんなら僕が残って」

「子どもあつかいしないですってば。平気だよ」

美里は膨れてこっちを上目遣いでにらんできた。その仕草がまた子

どもっぽかったけど。

「そうだったね、ごめん」

僕は妹の頭をポンポンと叩いた。

「それじゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい、お兄ちゃん！」

美里は目一杯笑って手を振った。

そして僕はドアを閉めたんだけど、その途端に後悔したね。どうせこのあと学校に行っても、憂鬱になるのは分かってたんだからさ。僕は河原の道なるべくゆっくり歩きながら、学校に向かった。

学校に着いたら授業中だった。時間的にたぶん2時間目。僕は教室には行かず、階段を昇って屋上に向かった。けど、屋上に出るためのドアには鍵がかかって、僕の持っていた唯一の希望は打ち砕かれちゃった。前にいた高校の屋上には自由に行けたんだけどね。

仕方なく僕は男子トイレに入ってタバコに1本火をつけた。僕はね、びっくりするくらいタバコを吸うんだ。1日に20本くらい吸うんじゃないかな。唯一の趣味なんだよ。

タバコを5・6本ふかしながら、僕は授業が終わるのを待った。授業の途中で教室に入って、クラスの注目を浴びることほど嫌なことはないよ、本当。

2時間目の終了を告げるチャイムが鳴って、僕は男子トイレを出た。廊下は既に授業を終えた生徒たちでごった返していた。疑うことなくみんな1年生で、僕より2つか3つ年下だ。

僕はその人混みの中をかき分けて、自分のクラスに入った。特に変わったところのない、普通のクラスさ。

僕は自分の席に座ってカバンを置くと、そのまま机に突っ伏して寝た。いや、もちろん本当に寝ちゃったわけじゃない。でもこうしておけば、誰とも口を利かずに済むだろう？幸いにして僕の席は教室の右端の一番後ろだったから、誰も僕が来たことに気付きもしなかったかもね。

教室はがやがやと騒がしくて、うるさいことこの上なかったな。時々誰かがバカみたいな奇声を発して、それに反応してまた誰かが、これまたバカみたいな笑い声を上げていた。そういうのって、癪に障らないか？

授業が始まって、担任の教師が黒板の前で自己紹介を始めた。そして、君たちは試験を切り抜けた優秀な生徒だとか、君たちが受かったのだから誰かがこの学校に落ちているんだとか、どこでも聞く

ようなことを語り始めた。

優秀な生徒か！じゃあ僕が合格したのは何かの間違いかなんかだったんだろうな。それに、何人かの人間を犠牲にして僕たちが合格したっていう考えはあんまり好きじゃないね。いや、確かにその通りなのかもしれないけど、でもそんなこと知ってどうなるんだい？それを聞いて、「そいつらのためにも頑張ろう」なんて考える奴なんていやしないよ。人間、自分のことしか考えないもんさ。

例えばだよ。君は自動販売機でジュースを買うとき、「このお金があればアフリカで病気に苦しむ子どもが3人助かる」なんてこと考えるかい？考えるわけないよ。そうなんだよ、人間は。別に責めるわけじゃないけどさ。

ああ、関係ないけど、担任の教師は遅刻して3限目から出てきた僕に対して何も言わなかったよ。それはそれでありがたかったけどね。教師の自己紹介の後には案の定僕たち生徒の自己紹介だった。これは本当に厄介だよ。だってそうだろう？そのクラスの中で、いや、その学校の中でダブってるのはきつと僕だけだったのだから。

僕の番になって、僕は黒板の前に立った。やばいね、吐きそうになったよ。クラス中の好奇の視線が僕に集中するんだ。中には隣のやつとヒソヒソと話をする奴なんかもいてさ、気が滅入ってしかたなかったな。もちろん僕は他の何人かの奴らと違って目立とうなんて考えなかったから10秒もかからずに終わったんだけど、それでもその時間は苦痛だったな。そして1番の問題は、この自己紹介ってやつはそれぞれの教科、国語とか数学とかの最初の授業に必ずさせられるってことだ。ほんと、厄介だよ。

それで担任がHRを始めたわけだ。クラスの係を決めたりだとか学級委員長を決めたりだとか。興味もないね。僕は1番楽そうなお仕事なのさそうなのを選ぼうと思ったんだけど、悲しいかな、クラスの不良っぽいのが先に取っつまいやがった。こういうのは声と態度のでかいやつが勝ちらしい。結局僕が選んだのは、というか残ったのが自動的に僕になったんだけど、国語の教科係かなんかになっ

たんだ。国語の教員に次の授業で使うものとかを訊きに行く係らしかった。もう1人クラスの中でも目立たない感じの女の子がその係になってたけど、哀れにも彼女は1人でそのめんどくさい係をするハメになっちまった。僕が1度もその仕事をやらなかったからね。HRの後は授業だったんだけど、授業の中身自体は、そうだな、普通だった。教師が教科書に書いてあることを喋って、生徒がそれをノートに写す。な、普通だろ？でも僕はこの普通の授業が大嫌いなんだよ。退屈だし、何よりちっとも面白くない。僕は頭も悪いしね。僕は特に何もすることなく、その日の授業を終えた。こんなのが毎日あるのかと思ったら、気が狂っちまいそうになったよ。

放課後、僕はいつものようにバイト先に行つて、下宿先にはいつもと時間、9時だよ、に帰つた。その日はバイクじゃなかったから、足が大いに痛かつたし、早足だつたから息が上がつてたな。僕は体力が全然ないんだ。タバコの害だよ、明らかに。僕の中に入ると、いつものように大家さんがいた。

「お帰り、圭介くん」

大家さんのいつもと変わらない笑顔。いつもならここで僕は会釈して部屋に行くんだけど、その日僕は大家さんに言わなきゃならないことがあつたんだ。とても大切な話が。

「あの…」

「なに？」

普段僕から話し掛けることなんてほとんどなかったんだけど、大家さんの反応はとても自然だつた。

「あの、美里を、妹をここに住ませても構いませんか？」

ただでさえ家賃を滞納してるのに、なんて厚かましいお願いなんだつて、自分でも分かつてたよ。けどここは大家さんをお願いするしかなかったんだ。

大家さんは軽く握つたこぶしを口に当て、クスクスと笑つた。

「そんなに頭を下げなくても大丈夫よ。ここにあの子を住まわせることに問題はないわ」

いや、なんて言つていいのか分からなかったよ。でも、なんだか嬉しかつたな。

「あ、ありがとうございます。…でも、迷惑じゃないですか？それに、お金とか…」

「いいのよ、お金の心配はしなくて。それに…」

その時僕は、大家さんがまた目を細めるのを見た。美里の頭を撫でてたときと同じように、それは悲しげで、寂しそうな表情だつた。

「あの子がいると、私も嬉しいから…」

部屋に戻ると、美里は朝と同じ格好、つまり僕のパジャマを着て、ベッドに腰掛けてテレビを見ていた。僕はこの部屋のテレビがついてるのを、その時初めて見たな。驚くかもしれないけど、僕はほとんどテレビを見ないんだ。よっぽど、それこそ死ぬほど暇なときくらいしかテレビを見ないんだよ。これはきつとみんなには理解できないようなことかもしれないけど、そうなんだ。だって大抵どのチャネルでも毒にも薬にもならないような、クダラナイことをやってるだろう？そしてそこで芸能人なんか笑ったり泣いたりしてるでもそれって、僕にはどうしても受け入れられないことなんだよ。なんだか、全部嘘っぱちに見えちまうんだ。うまく説明できないけど。そこにいる芸能人やなんかは、みんな嘘つきで仮面を付けて、表裏を使い分けてるんじゃないかって疑ってしまっただよ。それはきつと当然のことかもしれない。いや、きつとそれが当然のこととで、みんなそれを知った上で見てるんだ。けど、やっぱり僕にはそれが受け入れられなくてさ。うん、なんだか説明するのが難しいけど、とにかく、僕はテレビをあんまり見ないってことさ。

それで、美里はテレビを見ていたわけなんだけど、僕に気付くと、

「おかえりなさい！」

と言って駆け寄ってきたんだ。僕は抱きついてきた妹の頭を撫でながら訊いた。

「1人で大丈夫だったかい？」

「大丈夫だった」

「お昼は？」

「おばちゃんか2時すぎに帰ってきたから、一緒に食べた」

「大家さん」

「でね、大家さん、とっても料理が上手なのよ。お昼はスパゲティを食べたの。とてもおいしかったよ。ソースも大家さんが自分で作ったの」

妹は目を輝かせながら、その日1日の報告をした。

「それで、それでね、午後からは少しおしゃべりをして、大家さん
がお買い物に行くから、私も来るかって訊いたの。でも、私行かな
かったの」

「どうして？」

「えっと、私、ちょっと眠かったからね、部屋でお昼寝してたの」
「よく眠れた？」

「うん。とっても。それでね、夕方に大家さんが帰ってきて、2人
で夜ごはんのハンバーグを作ったんだ。私、とっても上手だって、
ほめられちゃった」

「それはよかったね」

「えへへ」

妹は照れたように笑った。その笑顔には一見の価値があるぜ。

「お兄ちゃん、夜ごはん食べた？」

「いや、まだだよ」

これは嘘だった。本当はバイト先で売れ残った弁当を食べていたか
らね。けど妹の期待を裏切るようなことをしちやいけないだろ？

「じゃあ、持ってくるね！」

妹は飛び跳ねるみたいにして、階段を降りていった。いやまったく、
可愛いもんだよ。

その日僕は結局2回も晩飯を食べるハメになった。ハンバーグの味
がどうだったかは、よく覚えていない。

僕は油断していた、と言うより忘れていたんだけど、その日も前の日みたいに美里と風呂に入ることになった。別に嫌ではないんだけど、どうしたものかね。

湯船に2人並んで浸かっていると、美里が思い出したみたいに話しかけてきた。

「お兄ちゃん、明後日ヒマ？」

「明後日？」

明後日は土曜日、学校は休みだった。もともと、美里は年中休みだけれどね。あ、ちなみに美里の学校からは何も連絡が入ってこなかったんだ。その時の僕にはそれがなぜかは分らなかったけど。

「何かあるのかい？」

「別になんにもないよ」

「は？」

僕は訊き返した。すると美里は僕を見ずに、

「何もないから、どこか行こうよ」

と言った。

「あ、ああ、そうだね。どこがいい？」

妹はしばらく細い身体をカクカク揺らしながら考えて、やがて、「お買い物」と答えた。

「わかった。じゃあ土曜日はお買い物な」

「うん！」

それから先、僕たちは週末の度に出掛けるようになった。買い物はもちろん、公園やら近所の貧相な動物園やら。遊園地には行かなかったな。あの子があの子なりに気を使ったのかもしれない。それでも移動費ぐらいの出費はそれなりにかさんだけど、美里の笑顔を見たら、そんなことどうでもよくなった。

次の日、僕はまた遅刻しながら学校に向かった。別に急いだりしないさ。むしろ行きたくないくらいだからね。金曜日っていうのが救いだったよ。

その日もいつも通り、僕は授業中も休み時間もずっと机に突っ伏していた。席を立ったのはトイレと昼飯を買いに行ったときだけだった。

今日もいつも通りだってそのときは思ってたんだけど、実はこの後、ちょっとした事件があったんだよ。いや、事件というのは少しオーバーかもしれないけど、それでも、僕にとっては事件だったんだ。

火曜日の6時間目は毎週数学だった。僕は勉強の中で、一番数学が嫌いなんだ。しかも嫌いな上に全然苦手ときたもんだから夕チが悪い。中学まではむしろ得意な方だったのに、高校に入って急に難しくなつてさ。それに高校の数学ってのは聞いてても意味が分からないし、将来何かの役に立つなんて全然思えない。それは今でも変わらないな。

そんなわけで僕は例によつて机で狸寝入りしようとしてたんだけど、その日ばかりは違った。

「あの…すみません」

蚊の鳴くような声って言うだろ？それはまさにそんな声だったな。

僕が振り向くと、隣の席の女子が身を縮めて、また蚊の鳴くような声で、

「あの…あの…その…教科書を忘れてしまつて…。だからその…」

と言つた。クラスの中で誰かに話しかけられたのは初めてだったな。

まあ、なんとなく話は分かつたから、

「いいよ」

と僕は答えた。

「あつ、その…ごめんなさい…」

女子は小さな身体をさらに小さくして、ほとんど聞こえないような声を出した。僕は努めて優しく言つたつもりだったんだけど。ま、仕方ないさ。

彼女はおずおずといった調子で机を寄せてきた。けど僕は机と机がくつつく前に、数学の教科書を彼女の机の上に置いた。

「え？あ、いや…」

女子は混乱してたな。普通机くつつけて真ん中に置くもんな。

「いいよ、別に」

僕は言つた。もちろん、努めて優しく。僕だって、女の子には優しく

くするさ。

しかし彼女は消えそうな豆電球みたいになっっていたな。

「でも…」

「いいって。俺が持つてても意味ないし」

いやあ、女の子と話すのって緊張するよ。僕の場合、女子と話すのは田尾先輩以来だったからさ。

「あの…ごめんなさい」

そう言うとな彼女は机を動かすのをやめた。机は中途半端な位置で止まった。

授業が終わって、僕が帰る準備をしていると、その彼女が話しかけてきた。最初はどうしてか分からなくて驚いたけど、教科書を貸したことを思い出した。一眠りしてたんだ、僕。

「あの、岩海くん…その、ありがとうございます…」

「いや、別にいいって」

「ごめんなさい…」

「いや、なんで謝るの？」

「え？あ、いや、その…、ごめんなさい…」

正直、この子は頭が少し足りないんじゃないかって思ったね。とにかく何につけても謝るんだよ。

まあそれは冗談として、僕は泣きそうな顔をした彼女がかわいそうになって、話を変えた。

「敬語とか使わなくていいよ。同学年なんだし。えっと…」

ここまで会話しといて、相手の、しかも同じクラスの奴の名前を知らないんだから、僕もなかなかのもんだったよ。

「岸本です…。岸本沙織です」

「あ、ごめんごめん」

彼女はやっと、ここに来て初めて笑った。

「それでは…」

岸本さんはお辞儀をして、友達であろう女子のグループの中に帰って行った。

僕はいいことをして、少し気分が良かったな。そして少しはこれらの学校生活がマシなものになるんじゃないかって、勝手に期待したんだ。

少しだけ季節が過ぎて夏になったときの話さ。その年の夏はすごく暑くてさ、学校に行くのがますます憂鬱になってきてたな。

学校の方だけど、あれから時々岸本さんと話をするようになったんだ。けどどうして僕みたいなつまらない人間に話しかけてくるのか、僕なんかと話してて何が面白いのか、全く分からなかったな。話したことはよく覚えていない。でもたぶん、すごくどうでもいい、他愛もない話をしたんだろうな。今日は暑いですねとか、この問題難しいですねとか、兄弟はいるんですかとか。けど、それが唯一、僕が学校で話をする時間だった。

私生活の方は、バイトを1つ増やした。だから時々帰るのがすごく遅くなって、夜中の11時頃、美里が眠ってしまってから帰ることが多くなった。僕たちがまともに話をする時間は朝と仕事の無い週末に限られるようになっていったけど、それでも美里は僕によく懐いていてくれたし、週末の度にどこかに出掛けた。

そういえばこんなことがあったな。

7月に入って間もない日の朝、僕がベッドで寝ていると、誰かが僕の身体を揺すり始めたんだ。

「起きて。ねえ、起きてってば！」

「うーん？」

僕は眠い目をこすって僕を起こした人物、美里を見た。見たんだけど、いやなんて言うのかな、そのまま固まっちゃった。彼女は学校指定の水着姿でそこに立っていて、腰にはでっかい浮き輪をはめていた。そしてふくれっ面で僕を見下していたんだ。いや、本当に参ったよ。

「どうしたんだ、その格好？」

なんで妹が朝っぱらからそんな妙ちきりんな姿をしていたのか、僕には全く理解できなかったな。でも美里は逆に不思議そうな目で僕

を見て、「あつ！」と声を漏らしたんだ。

「お兄ちゃん、昨日プールに行くって約束したじゃない！」

ああ、そういえばそんなこと言ってたなと僕はぼんやりと考えた。でもだからって、朝からその格好はないんじゃないかな？せめて服を着てほしかったね。

「昼からじゃダメ？」

僕はそう訊きながら、やっぱりダメなんだろうなと思った。彼女は素直じゃあるけれど、妙なところで強情だからさ。

「ダメ！今から行くの！お昼から行ったら人がいっぱい泳げないでしょ？」

美里の予想通りの答えにがっかりしながら、僕はいそいそと準備を始めた。美里はそれまでとは打って変わって、ニコニコしながら僕を待っていた。

まだ午前中だったのに、プールには既にたくさんの人がいた。僕は水着を持ってなかったから、プールサイドに設置されたテントの下で、美里が遊ぶ姿を眺めていた。

美里の泳いでいたプールはあんまり深くない、小学生用のプールで、美里と同じか、それよりちっちゃな子たちがたくさん泳いでいた。プールの中ではしゃぐ美里の濡れた白い肌は、強い陽射しに照らされて眩しく輝いていた。その姿はまるで1枚の絵画を彷彿とさせたね。賭けてもいいけど、あのプールにいたどの子よりも美里は可愛かったぜ。ひいきとかじゃなくてさ。

テントの下の日陰にいたとはいえ、コンクリートのプールサイドはかなりの暑さになっていて、朝たたき起こされたのも相まって、僕は次第に眠くなってきていた。

「そついや…」

薄れゆく意識の中で、僕はあることを思い出していた。

「そついやあの屋上も、こんな感じだったよな…」

デジャブのような錯覚を覚えながら、僕は2年前の夏の記憶に引き込まれていった。

僕は学校の屋上ってというのが好きだ。誰もいないし、いつも気持ちのいい風が吹いていたから。

前の高校に入学してすぐ、僕はその場所を見つけた。そこには自由に入入りできて、しかもまじめな進学校だったから、授業中に限らず、その屋上には誰もいなかった。

その高校でも授業を受けるのは退屈だったね。みんなよくまあ、あんな拷問みたいなものに耐えられるな。言葉は悪いけど、正気じゃないね。吐き気がするよ。だから僕は授業中ずっと、その屋上で

タバコを吹かして過ごしていたんだよ。

そういや、タバコを吸い始めたのもちょうどその頃だったかな。なに、別に大した理由はなかったんだ。正直、タバコをかつこいいとは思ってなかったし、特別おいしいとも思わなかった。けど、僕は恐ろしく無趣味な人間でね、本も読まないし音楽も聴かないから、サボってる間死ぬほど暇だったんだよ。だから時間を潰すためにタバコを吸い始めたんだ。

それで僕は授業があつてゐる間ずっと、屋上の日陰でタバコを吹かしていたわけさ。

その屋上には何にもなくつてね。あるのは貯水タンクくらいで、あとは周りをぐるっと囲んでいるフェンスぐらいだった。まあ、それが僕がそこを気に入ってる理由だったんだけどね。

屋上からの眺めは、そうだな、そこそこよかったと思うよ。それほど都会でもなかったから高いビルなんかはなかったし、住宅街やら、小さい森なんかまばらに見えるくらいだった。

でもね、気に入らないところもあったんだ。それはね、いつも上に見えていた青空だった。もし君がさ、青空の好きな人間ならば謝るけど、僕は青空つてのが嫌いなんだ。苦手って言った方が正確かもしれないな。中でも、雲一つない青空なんてのは見てて頭が痛くなってくるね。こういう話をする、みんな僕のことをクレイジーな奴だっと思うだろうな。実際そうなんだろうさ、僕は。でも僕から言わせてもらえば、空が青いことの方が、僕にとっては不自然極まりないことなんだ。なんで誰も、空が青いことに疑問を持たないんだ？言つとくけど、僕は光のスペクトルがどうか、そんな話をしてるんじゃないんだぜ？どうして誰も、空が青いことに違和感を覚えなかつて話をしてるんだ。分ってるよ。狂っているのは僕の方だつてことぐらいさ。でも、それでもやっぱり、僕は青空が好きになれないや。

そしてあの夏の日、夏休み間近の7月だったと思うけど、僕はその日もその屋上にいた。

その日も夏らしい、バカみたいによく晴れた日で、僕は少し憂鬱な気分でタバコを吹かしていた。誰もいない屋上。静かに過ぎていく時間。どこにいたって、僕にはどうでもいい時間だった。

「あー、いけないんだ」

僕しかいないはずの屋上で声がした。

「高校生はタバコ吸っちゃイケないんだぞー」

屋上の入口に、女生徒が1人立っていた。上履きの色から察するに3年生。ニヤニヤしながら僕を見ていた。

僕はタバコを隠そうともしなかったし、言い訳をしようともしなかった。やつても意味がないって分ってたし、なんとなくあきらめてもいたしね。もしかしたら誰かに見つかるのを望んでいたのかもしれない。

女生徒は僕の前に来てしゃがみ込んだ。まだニヤニヤしてた。けっこう美人だなって、僕は見当違いのことを考えてたな。

不意に彼女は手を伸ばし、僕の口からタバコをひったくると、それを自分で吸い始めた。そして身を滑らせるように僕の隣に來ると、そのまま何も言わず、ぼんやりと青空を眺めだした。

僕はしばらく、そんな彼女を眺めてから、もう1本タバコを取り出して、一緒に青空を眺めた。不思議と嫌じゃなかったな。

やがて彼女がポツリと言った。

「雨、降らないかな…」

それが僕と田尾先輩の、初めての出会いだった。

僕が屋上で出会った上級生の女子は田尾と名乗った。下の名前は訊かなかったな、そういえば。

田尾先輩とはその日からほぼ毎日、その屋上で会った。でも特に何をしたってわけでもなくて、ただ並んで座って、ずっとタバコを吹かしてるくらいだった。たまに先輩が持ってきてた音楽プレイヤーで曲を聴いたりもしてたな。全然知らないアーティストの、聞いたことのない曲を一方的に、半ば強制的に聴かされてたよ。どうも先輩のフェイバリットだったらしい。田尾先輩曰く、「あんまり売れてないロックバンドの曲」なんだそうだ。正直、僕は好みじゃなかったね。

僕らのそんな屋上での日々は夏休みが明けても続いた。田尾先輩が3年生だっていうのはさつき話したと思うけど、普通受験生つてのはそんなくらいの時は勉強してるもんじゃないのかな？

「先輩は受験とかしないんすか？」

ある日僕は先輩にそう訊いてみた。田尾先輩はその時僕の隣で、持ってきたプリントをなんかを丸めたり投げたりして遊んでいた。

「あー、受験ねー。どーしよっかなー？」

先輩はプリントで作ったボールを投げた。ボールは大した距離を飛ばずに落ちた。

「なんか、かつたるいんだよねー」

「行きたい大学とかないんすか？」

忘れてるかもしれないから言っとくけど、その高校は一応進学校なんだ。中学までは勉強ができたんだぜ、これでも。

「うーん、ないなー。つか、別にどーでもいいや」

田尾先輩はいつだって投げやりで無気力だった。それでいつもフラフラしてる印象があったな。

「先輩くんはなんかあんの？」

「へ？」

「し・ん・ろ」

田尾先輩はカバンの中に詰め込まれてたプリントの束からまた1枚抜き取った。A4サイズの上白紙。なんか赤い印鑑みたいなのが見えたけど、次の瞬間にはボールになっていた。

「俺ですか？…ないなあ…」

「まあ君はまだ1年だからね。あたしは3年だから親とか先生がもううるさくってさー。あはは、困っちゃうよね」

そう言っただけ彼女は笑った。本当、彼女は笑うのがとても上手いんだ。もちろん作り笑いなんかじゃない、本物の笑顔がさ。

ひとしきり笑って、彼女は続けた。

「でもあれだよ。人生、そんな悩んでも仕方ないじゃん？人生なんて遊びみたいなもんなんだし」

「遊びっすか？」

「そう。人生なんて、生まれた時にもらったおまけみたいなものだ。遊びだから真剣じゃない。遊びだから誰も期待しない。遊びだから失敗してもあきらめがつく。それでも思っていないとやってられないでしょ？」

彼女はそう言っただけ、またプリントでできたボールを放った。今度はフェンスまで届いて、当たって落ちた。

「そんなもんすかねえ…」

僕はタバコをくわえながらそう言った。

人生は遊び。確かにそうかもしれない。でもそれは、どこか寂しい気もした。

「先輩はさ…」

「ん？」

「先輩は夢とかある？」

我ながらダサいことを訊いたもんさ。行って首を絞めてやりたいね。よっぽどセンチな気分になってたらしい。

「なにに？今日はやけにあたしに質問ばっかしてくるね？もしか

して惚れた？」

意地悪く笑った。僕は恥ずかしくなって目をそらした。普段はそんなに意識してなかったけど、彼女は美人だからさ、よけいに緊張するんだ。

「別に答えたくないならいいですよ。忘れてください」

「あは、可愛いな君は」

先輩はニヤニヤしっぱなしだった。人をからかうのが好きなんだ、彼女。

それで彼女は、ちょっと首をかしげて、さっきの僕の質問について考えだした。

「そだねー。あるっちゃあるかな？」

「へえ。なんすか」

と僕は訊いた。

「えー、絶対笑うつしょ？だから言わない」

「じゃあいいすよ」

「そんな風に言われるとなー。…聞きたい？」

「それなりに」

「ふふん、誰にも言わないでよ」

彼女は柄にもなく顔を少しだけ紅くしていた。そんな先輩を見たのは、その時だけだったと思う。

「誰に言えってんですか、そんなこと」

「あはははは！そうだよ。じゃあさ、耳貸して」

別に周りには誰もいなかったんだけど、どういつつもりか、田尾先輩は僕の耳元に顔を寄せて、その言葉を、彼女の夢を囁いた。

それはとても意外で、それでいて先輩にすごく似合っている。そんな感じだった。

「え？」

僕は思わず声を上げていた。だって、本当に意外だったんだからさ。「なに？そんな顔しなくてもいいじゃない」

先輩は不機嫌そうに顔を歪めて、でもすぐに笑った。

「ま、マジで考えてるわけじゃないんだけどねー」
彼女は屈託のない笑顔を見せた。先輩はそう言ったけど、きっと、
本気だったんだろうな。

次の日から、先輩は屋上に来なくなった。授業をまじめに受ける気になったのか、それとも学校自体に来なくなったのか分からなかったけど、たぶん前者だと思う。その時はもうすっかり夏が終わって、地球は秋を忘れたみたいにバカみたいに寒くなっていたいな。僕は屋上の風の当たらない物陰に隠れて、1人でずっとタバコを吸ったりぼんやりと過ごしていた。

別に寂しくはなかったさ。僕がそんなところにおいても心配するような友達はいなかったし、先生たちだってそんな生徒のこと、そりゃあ最初は気にかけていたかも分かんないけど、無視することを決めてたらしかったからね。

田尾先輩が来なくなっても、僕はずっとそこにいた。田尾先輩といたって、何か話をしたりすることは稀だった。いつつも2人とも黙ってたからさ。でもね、それは嫌な沈黙じゃないんだ。教室やなんかの沈黙とは違うんだ。うまく説明できないのが残念だけど、分かってほしいな。

それから冬休みも明けて、すぐに2月になった。僕だって冬のクソ寒い中ずっと屋上にいるわけにもいかなかったから、たまには教室に顔を出した。机に座ってずっと窓の外を眺めている僕に話しかけてくるような奴はほとんどいなかったけど、時々、だらしなくていやらしい目をした頭の悪そうな奴が、仲間を2、3人引き連れて話しかけてきたことがあったな。完全に人を見下した感じの、いやらしい連中がさ、僕に話しかけてくるんだ。僕はいつもシカトしてただけど、いや、ああいうのって本当に人を憂鬱にさせるね。奴らはそういうのが得意なんだよ、生まれつき。はつきり言ってさ、ああいうのはみんな死んじゃった方がいいと思うね。もちろん僕にそんな度胸はないんだけどさ。ケンカとか嫌いなんだ、僕。

そんな感じで僕の憂鬱な日々は過ぎていって、卒業式の日になった。

もちろん僕のじゃなくてさ。

1年生は卒業式に参加する必要がないからその日は休みだったんだけど、僕は呼ばれてもないのに学校に行った。誰もいない校舎を抜けて、屋上に昇ったんだ。

そしたらやっぱり、田尾先輩はそこにいた。田尾先輩はフェンス越しに外を見ていたけど、僕に気付いて振り向いた。

「…卒業式、行かなくていいんですか？」

こんなところで何をしているのかって僕は訊いた。おかしな話さ。

僕は田尾先輩がそこにいることを期待してそこに行っただし、田尾先輩だつてきつとそれを分かってたんだからさ。

先輩は笑っていた。でもいつもと違う、湿った笑顔。

「後輩くんさ、いつかあたしに訊いたよね。夢はあるかって」

僕は答えなかった。先輩は続けた。

「あたしね、ずっと逃げてる気がしてた。言い訳して、隠して、何度も何度も自分をだましてた。でもね、もう、そんなの、嫌なんだ

…」

冬の曇った空の下、冷たい風が吹いていた。先輩を、初めて遠くに感じた。

先輩はフェンスの方に顔を向けて、ずっと遠くの方を見ていた。

「あたしね、東京に行くんだ」

「…」

「そこがさ、あたしの夢が叶えられる場所だと思うんだ」

「…」

先輩が僕の方に歩いてきた。うつむいたまま、僕の前で立ち止まった。

彼女は、僕に何かを期待してたんだと思う。僕は何かをすべきだったんだ。気の利いた言葉のひとつでも掛けたり、抱きしめて、キスのひとつでもすればよかったんだ。田尾先輩が何を考えていたにしろ、僕は、そうすべきだったんだ。でも…。

「…頑張つて下さい、先輩…」

それしか言えなかった。何もできなかった。本当に僕は、何を考え
ていたんだろうな。

苦しい沈黙だった。僕と先輩の間に、コンクリートでも流し込んだ
みたいに。

「うん…頑張るよ…」

先輩がうつむいたまま言った。ああくそ。今すぐ自殺したい気分だ
ったね。

その時不意に、先輩が顔を上げて、顔中にニカツと笑いを広げた。

「ま！そういうことだから、君もこれから頑張るんだぞ」

それが無理やり作った笑顔だって、僕は知っていた。でも僕は、何
も言えないでいた。

「じゃあね！」

先輩は僕の横をすり抜けて、階段を駆け下りていった。両手を広げ
て、スキップしながら、悲しそうな背中をして…。

取り残された僕はしばらく屋上で立つていた。どれくらいそこ
にいたのかは覚えていない。ただ、風がとても冷たかったってこと
は覚えてる。

正直なところ、僕は先輩をどう思ってたんだろう。好きだったのか
もしれない。嫌いだったのかも知らない。分からないや。でもひと
つ分かっていたのは、彼女が、田尾先輩がすごく自分に似ていたっ
てことさ。どこが似てたなんて、そんなことは訊かないでくれよ？
自分でもよく分かってないんだからさ。先輩は僕にすごく近くて、
すごく遠い存在だったんだと思う。だから、僕は先輩のことがすご
く好きでもあったし、同時にすごく嫌いでもあったんだと思う。分
からないな。やっぱり僕には全然分からないや。それでもこの思い
は、僕の中でずっと、ぐるぐると回り続けていたんだ。

声がして、僕は目を覚ました。そしたら、目の前に美里がいた。

「お兄ちゃん？」

なぜか美里は心配そうな顔をしてたな。僕はプールサイドのテントの下で寝てただけなのにさ。でもそのわけはすぐに分かった。

「お兄ちゃん、泣いてるの？」

「え？」

目をこすつたら、涙が指に触れた。僕は夢を見て、泣いてたみたいだった。まったく、あんな夢を見るなんて、未練がましいにもほどがあるね。

「ああ、そうみたいだね。なんでだろう」

僕はそう言いながら、改めて美里を見た。彼女はまだ不安そうな顔をしていた。

ここで僕は、美里の後ろに立っていた、水着姿の小さな子どもたちに気付いた。男の子と女の子、兄妹だと思った。なんとなく。

「美里、その子たちは？」

僕は訊いた。美里はまだ少し心配そうな顔をしながらも、僕の質問に答えた。

「さっきそこで一緒に遊んでたの。アキヒロくんとレイカちゃん」

僕が2人を見ると、2人は可愛らしく美里の後ろに隠れた。

美里のすごいところはね、誰とでもすぐに友達になっちゃうところなんだ。本当、会ってすぐに友達になれるんだよ。そして彼女はとても面倒見がいいんだ。とても優しいんだ。

「それでねお兄ちゃん、お金貸してくれない？この子たちが喉が渴いたって」

「うん、もちろんだよ」

僕は美里に3人分のジュース代を渡した。こういう子どもたちのためなら、僕はいくらだってお金を出せるね。本当の話さ。

美里はその兄妹を連れてジュースを買いに行った。その姿を見送りながら、僕は、「本当にいい子に育ったな」なんて恥ずかしいことを考えていた。

美里たちが帰ってきた。兄妹は1本ずつジュースを持っていてご機嫌だった。「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう」なんて言っちゃったりしてさ。そして2人は手をつないで、たぶんだけど親のところに帰っていった。

その時美里が、自分の持っていたジュースを僕に差し出してきた。

「はい、お兄ちゃん」

これには参ったね。彼女、自分の分じゃなくて僕の分を買ってきていたんだ。彼女はそういう子なんだよ。いつも周りの人間のことを気遣っていて、自分を犠牲にするんだ。10歳の子供がだぜ？この1週間前だつて、彼女、風邪を引いたことを黙ってたんだからさ。僕に迷惑をかけたために。

「いいよ、僕は。それは美里の分だよ。美里がお飲み」

そう言っても、彼女は聞かないんだ。

「お兄ちゃん、ずっとここにいたんでしょう？今日はとても暑いんだから、飲まなきゃダメよ」

「でも、それはお前のじゃないか」

「私はいいの。お願いだから」

美里から「お願い」なんて言われた日にゃ、飲まないわけにはいかなかったね。彼女の「お願い」は強いんだよ、すつこく。

「分かった。じゃあ2人で分けよう」

「うん！」

とは言ったものの、彼女は自分が先に飲むことを承知しなかった。さつきも言っただけど、けっこう頑ななところがあるんだよ。

それで僕は先にジュースを一口飲んだ。その後それを美里に渡して、ようやく彼女はジュースを飲んだわけさ。

2人で並んで座ってる間、美里はさっきの兄妹のことを、やっぱり兄妹だったんだけどさ、僕に話してくれた。兄のアキヒロくんはサ

ツカーをしてるんだとか、妹のレイカちゃんはずごく恥ずかしがり屋さんなんだとか。彼女はすごく楽しそうだったな。きつと久しぶりに同じ年頃の子たちと遊んだからだろうね。美里はいつも部屋で一人ぼっちだったからさ。

昼になって、僕たちは適当なファーストフード店に入って昼食をとった。そこでいろいろと話をしたわけだ。

「そついえば美里。風邪の方はもう大丈夫なのか？」

「うん、もうすっかり治ったよ。ありがとう」

「それならいいんだけど、少し顔が青白いような気がしてさ」

「平気。ちよつと寒かっただけ」

「まったく、それでよくプールに行こうなんて言えたよな」

「えへへ」

「それにさ、美里最近おなかの調子でも悪いのか？たまにおなか押さえて気分悪そうにしてるけど」

「それは…それは大丈夫よ」

「なんで？何かあるならちゃんと言えよ。もしかしたら悪い病気がかもしれないし」

「平気だつて」

「そつは言っけどさ。一応病院に」

「平気だつてば！」

いやはや、女の子と話すのは難しいね。こつちが心配してんのに、逆に怒られるんだからさ。誰か女の子の心理学の本でも出せばいいんだよ。きつと売れると思うから。

午後もひとしきりプールで泳いだ後、僕たちは夕方近くになって部屋に戻った。プールまではちよつと距離があつてさ。美里は僕のバイクに乗りたがつたんだけど、僕は乗せなかった。妹をバイクには乗せないつて、心に決めていたんだ。ついでに言つと、僕は美里の前ではタバコを吸わないようにしていた。

部屋に戻るなり、美里はベッドに飛び乗つて、パツタリと倒れ込んだ。よつぽど疲れていたんだろうな。そのまますぐに寝ちまった。

週末の度に僕と美里は出掛けていたんだけど、毎回美里はそうやって遊び疲れて寝ちまうんだ。たまには僕も部屋でゆっくりしたかったんだけど、それは仕方ないね。

僕は美里に毛布を掛けた。すごく幸せそうな寝顔だったな。あまり体力がないくせして、いつもぶっ倒れるギリギリまではしゃぎまくるんだからさ。

それをしばらく眺めていたら、美里が小さな声で何か言った。よく聞き取れなくて、僕は耳を近づけてみた。

「……さい……」

寝言みたいだった。

「……ちゃん……なさい……」

美里はそれ以上何も言わなかった。僕がこの言葉の意味を知るのは、もうちょっと先の話になる。

夏休みが目前に迫っていた。僕にとっては、2回目の高1の夏休みだった。なかなか体験できないことじゃないか？なんにしろ、これでやっとあの気の滅入る教室やら授業やらから解放されると思ったら、僕は居ても立っても居られないような、そんな気分になったね。なんなら勝手に夏休みを繰り上げてもいいくらいだったよ。ま、しなかったけどね。

バイトが終わって下宿先に戻った。その日も夜中の10時過ぎ。僕は部屋のドアをそっと開けて中に入った。けどその日は珍しく美里はまだ起きていて、彼女はベッドに腰掛けてテレビを見ていた。

「なんだ、起きてたのか」

「うん。お帰りなさい」

「ただいま」

そう言いつつ、僕はちよつとした違和感を覚えた。美里の声に、元気がないような気がしたんだ。

「美里、具合でも悪いのか？」

僕は言った。けど美里は、「そんなことないよ」とすかさず否定した。嘘をついてるなって、僕は直感したね。前にも言ったけど、彼女は周りのことをいつも気にして、周りに迷惑を掛けないようにしてたんだよ。そのためだったら、平気で嘘をつくんだ、彼女。

「ちよつといいかい？」

僕は嫌がる美里を無視して、彼女の額に手を当てた。

「熱があるじゃないか。どうして何も言わなかったんだ」

彼女の首筋に触れてみた。そこまでひどくなかったけど、熱があった。やっぱりこの前のプールのせいなのかと、僕は後悔した。

「ごめんなさい……」

彼女はうつむいて黙りこくつちまった。やれやれと僕は首を振って、美里をベッドに寝かせた。よく見ると顔も青白かった。

「美里。僕は怒ってるわけじゃないんだ。これっぽっちも怒ってなんかいないよ。でもね美里、何かある時はそれをちゃんとやってほしいんだ。迷惑なんかじゃない。僕はそうしてほしいんだ。分かったかい？」

美里は目を伏せたまましばらく何も言わなかった。でもその後小さな声で、「分かった…」と言った。

「ごめんね、お兄ちゃん」

見ると彼女は目に涙まで浮かべていた。それは今にも消えてしまいそうな表情で、僕は悲しくなっちまった。僕はなるべく明るく振舞って、

「バカ。何泣いてんだよ。いいんだよ、謝らなくても。お兄ちゃんこそ気付いてあげられなくてごめんな」

ここでやっと、美里は少しだけ微笑んだ。毛布で顔を半分隠して、目だけを出すような感じでさ。

「ありがとう…」

「気にするなよ。僕たち、兄妹じゃないか」

「うん…」

僕は美里の頭を撫でて、大家さんに薬をもらいに行った。大家さんはキッチンで雑誌が何かを読んでいるところだった。

「すみません、風邪薬が何かありますか？」

「あら？どうかしたの？」

大家さんは首をかしげた。

「いえ、妹が熱があるみたいで」

内心、僕はちよつと腹を立てていた。だって彼女は夕方ごろにいつも美里と一緒にいたんだから、その日美里の体調が悪いのを知っていたはずだったんだ。まさか気付かなかったなんて言うんじゃないだろうなって思っていた。

「ごめんなさい、気が付かなくて…」

「そんなことはないですよ。急に熱が出ただけかもしれませんし」
まあ心の中では、「ふざけんな」って言ってたんだけどさ。

僕が薬をもらって部屋に戻ろうとしていたら、大家さんが呼び止めた。

「最近、美里ちゃんあまり体調が良くないわね」

「ええ、そうですね」

「なにか悪い病気じゃなければいいのだけど…」

「大丈夫ですよ。ご心配なく」

僕の声はあからさまにトゲトゲしてたんだろうな。けどそのときの僕にはそれを止めることはできなかった。

大家さんはそんな僕の心情を知ってか知らずか、話を続けた。

「美里ちゃん、確か今10歳よね？」

「ええ、それが何か？」

よく分らない質問だったからかもしれないけど、僕は大家さんが少しずつ嫌いになってきていたな。

「もしかしたらって思ってたんだけど…。いえ、やっぱりなんでもないわ」

僕はそれに口々に返事もせず部屋に戻った。

このとき僕が何を考えていたかっていうとね、やっぱり美里が頼りにできるのは自分だけなんだってことなんだ。自分しか妹を守れないって、信じて疑わなかったんだ。

部屋に戻って薬を飲ませながら、僕は美里に言った。

「明日病院に行ってみような。分ったかい？」

「いいよ、そんなことしなくても。ただの風邪なんだから」

「良くないよ。だって美里、ここ1カ月くらいずっとじゃないか」

「だから、大丈夫だって言ってるの！」

そう言う彼女は、布団をかぶって眠ってしまった。

きっと彼女はお金の心配でもしているのだろう。そう思いながらも、実はこのとき、僕はこのことをあまり深刻には考えていなかったんだ。

美里が熱を出した次の日、ちょうど仕事が終わった大家さんに美里を任せて、僕は学校に行った。本当は僕が残って看病をしたかったんだけど、美里が頑としてそれを拒否したんだ。彼女なりに気を遣ってくれたのが嬉しくてさ。それだけで泣きそうになったね。

前にも言ったようにこの高校には屋上への入り口がなかったからさ、僕は授業を受けるしかなかった。保健室って手もあったんだけど、そう毎日行くわけにもいかないし、あれってけっこう迷惑だからね。ま、学校にいと絶えず頭痛と吐き気がしていたから、行っても問題じゃなかったんだけどさ。

でも、そんな学校生活の中でも唯一楽しいものがあった。それは同じクラスの女子、岸本沙織さんと話することだった。席替えがあつてとつくの昔に隣同士じゃなくなっていたんだけど、たまに向こうから声を掛けてきてくれていた。彼女はおとなしくて控えめな感じで、僕も話上手じゃなかったから、会話なんて呼べる代物じゃな

かったけど、そのときだけ僕はあの気の滅入るような学校の中でマトモであれたんだと思う。

僕が席に着くと、岸本さんは女子の友達グループの中からツツツと抜け出してきて、僕の前に立った。

「お、おはよう」

「おはよう」

「……」

「……」

まあ、こんな感じ。

とはいえ、最初から比べるとだいぶマシになったかな？少なくとも岸本さんは敬語を使わなくなってたし。いや、話し方が丁寧なのはそれとはまた別なんだけど。

それからいろいろと話をして、流れは美里の話になった。

「美里の奴、最近体調が悪いみたいでさ。しょっちゅう風邪っぽい症状になったり、おなかを押さえたり、気分が悪そうにしてるんだ」

「そう、心配だね……」

彼女、本当に心配そうな顔をするんだ。他人のために本気で心配してくれるなんてさ。いい子なんだよ。

「そういえば、妹さん、おいくつでしたっけ？」

何か似たようなことを昨日聞いたなと思いながら、「10歳だよ」と答えた。

「それがどうかしたの？」

気になって僕が訊くと、彼女は突然顔を真っ赤にした。

「う、ううん、何でもないよ。ごめんなさい……」

僕はもうちょっと詳しく訊きたい気もしたけど、やめておいた。

「でも、うらやましいな……」

岸本さんが言った。僕は、「え？」と訊き返した。

「そんなに心配されて、妹さんがうらやましい。岩海くん、妹さんのこと話すとき、生き生きしてるんだもの……」

「あはは、そうかな……」

僕は妙に照れくさくなった。そのときちょうど始業のチャイムが鳴って助かったけど。

「またね…」

岸本さんは小さく手を振って席を離れた。

僕は授業中、大家さんや岸本さんの言ったことについて考えていた。妹が10歳であることと、体調が悪いことなんて関係があるのかなって。

「ああ、そういうことか…」

結論に辿り着いて、ようやく理解した。そしてやはり、少し気恥ずかしくなった。

「どうしろってんだよ…」

まさか本人に直接言うわけにもいかないから、僕は少しだけ途方に暮れた。やっぱり女の子ってのは難しい生き物だよ。男とは根本的に違う生き物なんじゃないかな。あれだけは一生かかっても理解しきれそうにないや。

そんなことを考えつつ、僕はこうも思った。美里も大きくなったんだなって。それまではあまり意識してなかったんだけど、少しずつ彼女も大人になってきてるんだと思うと、それは嬉しくもあり、少し寂しくもあった。

その夜のことだ。半分夢の中で、浅い眠りについていた。体調の悪い美里をベッドで寝かせ、僕が下の床で寝ていたんだけど、ベッドの方から、なんだか呻き声が聞こえてきた気がしたんだ。

「……………」

それはか細い、苦しみを押し殺したような声だった。僕はそれがなんなのか気になりながらも、バイトで疲れた身体を起こすことができず、そのまま深い眠りに落ちて行ってしまうとした。そのとき、ドサツと上から美里が転がり落ちてきた。しかも参ったことに、僕の上に落ちてきたんだ。

「うおっ？」

僕は驚いて飛び起きた。そして美里を見ると、彼女は苦しそうに笑ったんだよ。

「えへへ、落ちちゃった…」

それまでに何度か美里がベッドから落ちていたことを考えると、それは不思議なことじゃなかった。けど、

「大丈夫か？」

「うん、ごめんね」

そう言うと美里は、ベッドに戻って眠り始めた。さっきの呻き声と言い、何か変だと思ったけど、いまいち確信がなかった。次の日に美里に訊いても、「大丈夫」としか答えないし、実際熱も下がっていた。あの呻き声だって、時間が経つにつれて、本当にあつたかどうか曖昧になってきていた。なんとなく腑に落ちなかったけど、またしても僕はそれを深くは考えなかった。

今にして思えば、それは美里からの最後のメッセージだったんだ。

7月の下旬、もう明後日から夏休みっていうその日は日曜日で、近

所の川原で花火大会がある日だった。当然美里は大はしゃぎで、風邪も少し良くなったし、2人で一緒に行くことになったんだ。前の日には浴衣まで買いに行かされてさ、僕はピンク色の可愛い浴衣が似合うと思ってただけで、美里が選んだのは、黒い下地に白線で川の流れを描いた、すごく大人っぽいものだった。それなりに値は張ったんだけど、あれはそれだけの価値があったと思うね。黒い浴衣は美里の白い素肌によくマッチしていて、大家さんに結ってもらった髪には派手過ぎず、それでいて上品な髪飾りが挿してあった。思わず見惚れちまうようなその姿で、美里はほんの少しだけ頬を染めて微笑なんかしていたな。

「すごく似合ってるよ」

「ありがとう」

美里はくるりと回ってみせた。本当に可愛らしかったな。

「それじゃ行こうか」

「うん！」

大家さんに見送られて、連れ立って出掛けた。

美里は興奮しっぱなしだった。川原中に並んだ出店をキョロキョロと見回しながら、「次はあれ！」を連発していた。僕らが生まれた町にはこういう行事がなかったからさ。美里のはしゃぎようを見て僕も嬉しくなった。

かき氷を食べ終わった頃にアナウンスが流れて、花火の開始を告げた。僕たちは運良く人の少ないところを見つけてそこに腰を下ろした。

いい眺めだった。鮮やかな花火の光がいくつも星のない夜空の中に浮かんでとても綺麗だった。そしてその彩りが川の水面に映り、それがゆらゆらと揺れていた。実を言うと、僕はそれまで花火が嫌いだったんだ。うるさいし、どこがいいのかちつとも分らなかった。でもそのとき僕は花火がこんなにも綺麗なものなんだって初めて気が付いた。きつとそれは僕の隣に、僕の大切な人がいたからだと思う。よく言うだろ。料理はなんとかって。

花火が夜空に打ち上げられているさなか、僕は隣に座っている美里を見た。美里は夜空の花火ではなく、僕を見ていた。目が合った。美里の潤んだ瞳が僕を見ていた。白い素肌が花火の放つ光に照らし出されて色を変えていた。ドキツとした。美里が、僕の知っている美里じゃないような気がした。黒い浴衣を着た美里。髪を結いあげた美里。僕の妹。黒い瞳が何かを訴えていた。花火の音が聞こえなくなった。時間が止まった。美里の唇が静かに動いた。何か言っていた。僕の意識は美里の白い肌に吸い込まれていく。何かが僕の身体の中で叫んでいるみたいだった。目と目。唇と唇。彼女の頬を染めるのは花火なのか？こんな気持ち、初めてだった。何十発という花火が一斉に炸裂し、見物客の歓声に驚いて僕は我に返った。

美里が顔を近付けていた。いや、僕が美里に顔を近付けていた。慌てて僕は顔を背け、夜空の花火に視線を戻した。

後に残ったのは、重く苦しい沈黙だけだった。僕は何か言わなければと必死になって考えた。美里はうつむいたままだった。

「あのさ…、なんて言うかな。その…、ごめんな…」

「…うん」

僕は絶望的に死にたくなっていた。自分が今何をしようとしていたのか分かってるのか？お前は美里に何をしようとした？自分で自分を心の底から憎んで、激しく罵った。

僕は美里にキスしようとしていた。

2人で夜の川原を歩いた。僕の少し後ろを美里が歩いていて、2人とも何も喋らなかった。

空に星はなくて、ただ月だけが浮かんでいた。満月だった。僕は月にウサギはいないと思うけど、たぶんあそこに星条旗は立っていないと思うんだ。あんな遠くて綺麗なところに、人間なんか行けるわけないよ。人間にそんなことできつこないんだ。だって人間は、自分が何をしているのかさえ、よく分かってないんだから。なぜ僕が美里にあんなことしようなんてしたのかも分かんないのに、月に行けるわけないさ。もし本当に月に行けるんだったら、どうか教えてほしい。どうして僕はあんなバカなことをしたのかをさ。

「ねえ……」

背中の方で声がした。僕は振り返らなかった。

「ねえ、お兄ちゃん……」

声は夏の虫の声より小さかった。振り返るのが恐かった。

「ねえ……」

美里がシャツの袖をつかんだ。僕は立ち止まった。

そのまま僕らは無言のまま、2時間ぐらい突っ立っていた。本当は20秒くらいだったのかもしれない。

「ねえ、お兄ちゃん。線香花火、しよう」

祭りの屋台でもらった線香花火。ちっぽけなおまけをもらって、美里はとても喜んでいたっけ。

「お兄ちゃん……」

シャツの裾をつかんだ手が震えていた。その震えは僕にも伝わって、僕の心臓を止めようとしてた。

このまま何も話さずに帰ってたかった。けどそれじゃダメだ。きつとそれはできない。できそうにない。僕は心の中で何度も自分に言い聞かせた。もしかしたら、この状況を変えられるかも知れないっ

て。

「…分かった」

2人で1本ずつ取ってライターで火を付けた。祭りでの打ち上げ花火とは比べものにならないくらい、小さな火だった。

美里の花火が激しく燃え、先っぽに大きな火の玉を作った。けどそのときちょうど風が吹いて、美里の火の玉は落ちてしまった。「あ」と小さな声を漏らす美里。火の玉はあっという間に消えてしまった。「残念だったね」

僕は笑いかけた。美里は頬を膨らませて、「いーもん、お兄ちゃんより大きかったから」と口をとがらせた。そして少しだけ笑った。僕の花火は燃え続けた。弱々しい小さな火で、最後まで。

僕はその日、朝から最悪の気分だった。その日は1学期最後の日、終業式の日だった。みんなで体育館の中に入って、校長の話を聞いたりするあれだよ。僕はね、そういった類の、体育館やグラウンドにみんなが集まったりするのが大っ嫌いなんだよ。考えただけで吐きそうになる。一定の空間の中に、たくさんの人間が入って来るんだ。気持ち悪いじゃないか、そんなの。誰とも分らない他人と同じとこに何時間も閉じ込められるんだ。死にたくなってくるよ、本当に。

そういうわけだから、僕はその日学校を休もうとした。でもそれもやめた。部屋には美里がいたんだから。

あの線香花火での会話が最後だった。あのときは2人で無理して話をして、笑って、忘れようとしたんだけど、時間が経つにつれてそれが苦しくなっていたんだと思う。そしてあれ以来、1度も美里とは話していなかった。1度もだよ。それだけあの部屋は、たった1晩の間だけど、地獄と化していた。美里と目が合う度に殺された気分になった。ベッドで一緒に眠らなかった。風呂も一緒に入らなかった。蛇の生殺しさ。生きたまま死んでるみたいだった。

学校には行きたくなかった。けど僕はこの町で、学校とバイト先とこの部屋しか知らなかったんだ。どこにも行く場所がなくて、それで仕方なく、僕は学校に行くことにした。

僕はわざとゆっくり歩いて、終業式に遅刻しようとした。校門に着くと、生徒たちが体育館に入っていく姿が見えた。僕は頃合いを見計らって、まるで泥棒みたいにして教室に入った。

誰もいない教室ってのは不気味だ。こんなところに1人でいる奴の気が知れないね。僕のことだけだ。

タバコでも吸おうかと思ったけどやめた。なんとなくそんな気分にはなれなかったんだ。やることもなく、僕は椅子に座ってぼうつと

天井を見上げた。

なんで自分はこんな所にいるんだろう。そんな疑問が頭に浮かんだ。大嫌いな学校。大嫌いな生徒たち。大嫌いな先生たち。そこには嫌いなものばかりだった。でもなぜ僕はそこにいる？なぜわざわざ高校入試を受け直してまでそこにいる？今すぐにでもそこを飛び出したいのに、なぜ？

教室のドアが開いた。見ると、岸本沙織がそこに立っていた。

「どうして、ここに？」

僕は驚いて立ち上がった。真面目な岸本さんが終業式をサボるはずない。

「その…、忘れ物しちゃって…」

嘘だ。そんなはずない。

「俺に、何か用？」

それしか考えられなかったね。岸本さんは身体を小刻みに震わせていた。息遣いが聞こえてきた。

「私…私…」

岸本さんが僕の目を真っ直ぐ見つめてきた。彼女の目を、初めて直視した。

「私…あなたのことが…岩海くんのこと、好きです！」

やっと振り絞ったような声だった。顔中を赤らめて、岸本さんは肩で息をしていた。

「ごめんなさい…こんなの、迷惑かもしれないけど、私、岩海くんのこと…岩海くんのこと…」

なぜだろう。このとき僕はなぜか、それが現実のこととは思えなかったんだ。現実感がないって言うか。その代わり、僕の中である思いが芽生え始めたんだ。

「えっと…これって何かのドッキリ？」

僕は訊いた。ひどく軽薄な声で。

岸本さんは身をビクツと引きつらせた。

「違うの！私は本当にあなたのことが」

「あ、分かった。これって罰ゲームかなんかでしょ？そうなんだろ、やっぱり。おかしいと思ったんだよね。岸本さんが俺に告白するなんてさ」

他のクラスメイトより2個年上で、クラスから完全に浮いてしまっていた僕は罰ゲームのいいターゲットさ。

岸本さんは泣きそうな顔をしながら震えていた。

「違う…違うの…」

僕は明るく笑った。

「なにに、どうしちゃったんだよ？岸本さんは演技が下手くそだなー。それじゃ罰ゲームってバレバレじゃん。あはは」

僕はカバンをひつつかんで、教室を出た。

廊下を走りながら、僕は何度も心の中で繰り返していた。これはきつと罰ゲームかなんかなんだ。だってそうだろう？岸本さんがお前のことを好きになるわけないし、ましてやお前なんかを好きになる奴なんかいやしないんだよ。もし万が一彼女が本当にお前のことが好きなんだとしたら、それは気のせいとか気の迷いか、あるいは彼女がキチガイかのどれかだよ。

ただ分かってるのは、お前がどうしようもないクズ野郎ってことだけさ。

ひどく、殺伐とした気分だった。もう、このまま死んじゃうんじゃないかってくらいなさ。実際、死んでもいいと思ったりもしていた。携帯電話の電子音がメールの着信を知らせた。受信1件アリの表示。部屋には僕と美里の2人きり。美里はテレビを見ていた。どこが面白いのか分からない、くだらないドラマだったな。画面の中で女優が笑った。作り物の中で作り物の笑いを浮かべていた。

僕はメールを読んだ。知らないアドレスからだった。

『今から学校に来てほしい。1年4組の教室で待つてゐる 石川』
どうでもよかった。どうでもよかったけど、部屋にいるよりはマシだった。僕はベッドから起き上がって、夏休みになったばかりの学校へ向かった。

教室に入ると、3人の生徒がいた。知らない女子と知らない男子。彼らの後ろに身を縮めている岸本さんがいた。岸本さんは僕に気付くと、目を見開いて、怯えた。なんとなく、可笑しかったな。

女子の顔には見覚えがあった。いつも岸本さんと一緒にいた奴だ。そいつとその横の男子は僕をまるで犯罪者でも見るような目で見ていたな。女子の方が進み出てきて僕の前に立った。女子は、「呼び出して悪い」と前置きして、

「なんで呼ばれたか分かる？」

やたらと偉そうな口振りで言った。僕は、「さあね」と投げやりに肩をすくめてみせた。男子の方の眉がピクリと動いてさ。笑っちゃいそうだったね。

「昨日、あなた沙織からコクられた時、あの子にひどいこと言ったわよね？」

まるで警察の尋問だ。なんなんだよ、お前ら。

「あの子すごく引つ込み思案で、私小学校の頃から一緒だけど、あの子が誰かにコクるとこなんて見たこともなかった。あの子は初めて勇気を出してあなたにコクったのよ。それなのに……」

僕は窓の外を見た。遠くに大きな入道雲が見えた。雨が降りそうだな。

「もし付き合えないのなら付き合えないって言っても、私は構わないと思う。けどあなたは、あの子の勇気を台無しにしたのよ。その責任は取ってほしい」

僕は男子の方を見た。ぶん殴りたくてしょうがないって顔してたな。「あなたに謝ってほしいの。本当に心を込めて、あの子に謝ってほしい」

謝れか！それこそ僕がこの世で一番嫌いな行為さ。あんな形だけの儀式に、何の意味があるって言うんだ？謝る側も、本当に心の底から謝罪しているのか分らないし、謝られる側も、絶対にそいつを許したりしないさ。そんなことで、何でもかんでも解決するなんて思ったら大間違いさ。

僕は岸本さんの前に立った。岸本さんは目を合わせようとしなかった。自分の腕をきつく握っていた。

ここで僕はね、飛びつきり冴えた冗談を思いついたみたいな気分になつてね。それを言ったら岸本さんはどうするかって、どうなるかって、すごく興味が湧いたんだ。

で、言つたわけだ。

「それで、いくら払えばいいの？」

僕は冷たく言い放った。岸本さんが顔を上げ、次の瞬間ワツと泣きだした。いい気分だった。背筋がゾクゾクした。僕の中で暗い何かがのた打ちまわっていた。はは、本当にいい気分だったね。

「てめえ！」

今まで何も言わなかった男子生徒が、いきなり僕を殴ってきやがった。僕は吹っ飛ばされて机の中に突っ込んだ。女子たちが悲鳴を上げた。

「てめえ、岸本がどんな思いしてんのか、分からねえのか！」
男が喚いていた。

嘘つきめ。お前はただ僕を殴りたかっただけなんだろう？前から気に食わなかった僕を殴るチャンスを狙ってたんだろう？

ところが、僕のマトモな思考はここまでだった。それから先はよく覚えていない。気付いたときには僕は自分の部屋のドアを乱暴に開けていた。美里が身体を強張らせた。

僕はカバンを壁に叩きつけた。無性にイライラして、手当たり次第に部屋にあつたものを蹴っ飛ばしてたな。

「どうしたの、お兄ちゃん……」

妹が怯えながらも、僕に声を掛けてきた。

「うるさい！」

僕は大声で怒鳴った。美里はわけが分からずに泣き出した。その泣き声が、僕の頭の中にガンガン響いてくるんだ。岸本さんが頭を抱え、「やめて！やめてよ！」と叫んでいる。僕は男子生徒を殴っている。何度も何度も殴っている。そんなイメージの断片が、美里の泣き声に混ざっていた。

「うるさい！泣くな！」

僕は美里に詰め寄った。美里は泣き止まなかった。

「黙れ！黙れよ！」

美里の肩を掴んで揺らした。美里はそれから逃れようとして僕の手を払った。

僕はキレた。

僕は美里の頬を平手で殴った。殴った瞬間、美里は泣きやんだ。僕の中から、サーツと血が引いていくを感じた。

美里は殴られたところに手を当てていた。うつむいたまま、身動きひとつしなかった。

「お兄ちゃんのバカ……」

小さく呟いた。

「お兄ちゃんのバカ！」

美里は駆け出してドアから飛び出した。階段を駆け下りていく音がした。

そしてそのまま、家の外に出て行ってしまった。

部屋に残された僕は、自分の手のひらを見た。熱を帯びて、火傷したみたいに熱かったのを覚えてる。きっと一生消えないんだって、そう思った。

世の中つてのは、他者との信用の上に成り立っているんだと思う。

例えばキミが橋を渡るとき、キミはその橋を造った人や会社なんかを信用して、崩れるかもしれないなんて考えもせずに橋を渡るだろう？もしかしたらその橋は手抜き工事や設計ミスで、いつ崩れてもおかしくない橋なのかもしれないのに、キミは無意識のうちに「この橋は崩れない」って信用して橋を渡る。

教科書にしてもそうさ。教科書に書いてあることを、キミは本当のことだと信じて勉強する。それが本当に本当なのかなんていちいち考えたりしない。

世界はそんな、もろくて不安定な信用の上にあるんだよ。もしその信用をなくしてしまったら、人は誰も信じられなくなって、何もできなくなっちまう。

僕が最初になくしたのは、大人への信用だった。

毎日毎日、来る日も来る日も、僕は僕を産んだ女に殴られていた。ご飯を食べるのが汚いだとか、部屋が散らかっているだとかで、いっつも殴られていたな。そんな僕を助けてくれる大人なんていなかった。僕は母親が嫌いになって、そして、大人が信用できなくなっ

た。

そんな僕が唯一信用できたのは、学校の友達だった。友達は無条件で信用できたんだよな。そして小中学校のときはいつも友達と陽が暮れるまで遊んだ。とても楽しくて、こんなのがずっと続けばいいと思っていた。けど、それは無理だったんだよ。事件は僕が中学3年生のときに起きた。

当時僕のクラスに、金山っていう奴がいてさ。色白で、太っていて、メガネを掛けていて、何をやっても鈍くさい奴で、いつも机で暗い顔をしてうつむいていた。そんな奴に友達が出来るわけなくて、そいつはいつも1人だった。

ある日僕は掃除中に、ふと興味が湧いて、金山に話しかけてみたんだ。それまで1度も話をしたことがなかったんだけど、これが意外と話しやすい奴だったんだよ。それにすごく聞き上手だった。そしてなにより、金山は掃除を一生懸命する奴だった。金山に見向きもしない奴らが汚していった床をさ、本当に一生懸命磨いてたんだよ。僕は参っちまったね。そいつにそんな一面があるなんて全然知らなかったんだ。でもきつと他の奴らは、特に女の子は、そんな彼の一面に見向きもしないだろうな。女の子は顔で男を決めるんだよ。性格なんて考えてるもんかい。誰も金山が掃除を頑張る姿を見ていないんだよ。見たって評価しないんだよ。それが僕には悲しかったんだ。僕は金山と友達になりたかった。

ところが数日後、金山が学校を休んだ。そしてそのまま何ヶ月も休み続けて、終いには卒業式にすら顔を出さなかった。もちろんこれはクラスの中でも問題になって、何度も話し合いが開かれた。けどみんな無関心だった。笑ってる奴すらいた。けど少しずつ、金山がなんで学校に来なくなったのかが分かってきたんだ。

金山はいじめに遭っていたんだ。それもハンパないいじめだよ。口にするのも反吐が出るようなひどいじめさ。でも僕にとって一番シヨックだったのは、そのいじめをしていたのが、今まで僕が親友だと思っていた奴らだったってことさ。僕は絶望したね。文字通りの絶望だよ。僕の親友は、金山をいじめるような最低の連中だったんだ。そしてクラスの奴ら、いや学校の奴ら全員が、金山を不登校に追い込んだんだって気付いたよ。その日からかな、僕が友達を信じられなくなったのは。

僕はベッドの上で横になって、そんなことを思い出していた。金山は今頃どうしているだろうか。美里が出て行った部屋で考えていた。外は小雨が降っていた。さっきの入道雲が近付いているのだろうか。美里は傘を持っていなかった。大丈夫だろうか。

僕は首を振って枕に顔を強く押し付け、きつく目を閉じた。そんなことを考えるな、ほっとけ。そう言い聞かせた。

ドアを誰かがノックした。僕は顔を上げた。

「はい？」

ドアの向こう側から声がした。

「入るわよ」

大家さんが部屋の中に入ってきた。いつになく険しい表情だった。

僕は起き上がってベッドの縁に座った。何の前置きもなく、大家さんは言った。

「雨、降ってるわよ」

大家さんの声は静かだった。

「知ってます」

「これから夕立ちになるわ」

「そうですね」

「いいの？」

「大家さんには、関係ないですよ」

僕はイライラしていた。早く消えてくれ。そう思った。

「美里ちゃん、泣いてたわよ」

「大家さんには、関係ないですよ」

「迎えに行つてあげなさい」

「大家さんには、関係ないですよ」

「きつとあなたのことを待って」

「関係ないって言ってるでしょ！」

部屋が静かになった。僕の声の木霊が聞こえてきそうで、ひどく居心地が悪かった。

外の雨は強さを急に増し始めていた。土砂降りだった。美里の泣き顔が頭から消えてくれなかった。

「行きなさい…」

大家さんの声は静かで、優しくかった。

僕はあてもなく町の中を走り回った。大きな雨粒が身体を打ちつけていた。雨に濡れたシャツが身体に貼り付いて走りにくかった。

さっきまでのイライラした気分は消えちまった。もう僕は美里のことしか考えられなくなつてさ、必死で美里を探したよ。どこかで美里が助けてと泣いている気がしたならなかった。言葉じゃ言い表せないような焦りと不安が身体の中で暴れていたんだ。

川原の道を走っていた時、視界の端に白い影が映った。見覚えのある白いワンピース。激しい雨に打たれながら、彼女は、倒れていた。

「美里オ！」

僕は駆け寄って、彼女を抱き起こした。美里の顔は真っ青で、身体は驚くほど冷たかった。

「美里！美里！」

僕は何度も彼女の名前を呼んだ。けど彼女は目を覚まさないんだ。何があだか分らなくなつて、僕は必死に叫んだ。声の限り、力の限り助けを求めた。誰か助けて下さい。誰か助けて下さい。誰も来なかった。雨が激しくなった。まるで世界から弾き出されたみたいな、そんな気分だったな。

「誰か、誰か来てよ！美里を助けてよ！」

これは、神様が僕に下した罰だったのかもしれない。お前はそこでずっとそうしているって、そこでずっと叫んでいるって、言われた気がしたんだ。

病院の待合室、僕は濡れたままそこに座っていた。美里は緊急処置室に運ばれていた。あれからどうやって病院まで運ばれたのか、正直よく覚えていない。

僕以外に人はいなかったな。僕は看護婦さんが持ってきてくれたタオルに包まっていた。着替えたかどうかとも言われたけど、僕は断った。

病院の中は清潔で、とても白かったのを覚えている。お医者さんや看護婦さんたちが慌ただしく走り回っているのを見ながら、僕は全然見当違いのことを考えていた。

僕はこの病院に、武器を持ったテロリストたちが攻め込んでくる様子を想像していた。彼らは手にしている拳銃やマシンガンなんかでみんなを威嚇して病院を占拠するんだ。そこに僕が颯爽と登場してテロリストたちから銃を奪って、そいつらをみんな殺した後、捕らわれていた美里を助け出すんだよ。まったく、僕の頭は本当に狂ってしまったとしか思えなかったね。美里が大変だったのに、そんなくだらないことをしたりするんだからさ。

3時間くらい経って、緊急処置室の赤いランプが消えた。僕はそれに気付いて、部屋から出てきたお医者さんを1人捕まえて訊いた。「先生、美里は？美里は大丈夫なんですか？」

お医者さんは僕の肩に手を置いて笑った。大きな身体をしたひげ面の先生で、なんとなく熊みたいだった。

「大丈夫だよ」

先生はそう言った。けど僕が安心する前に、彼は顔を曇らせた。

「話があるんだ。来てほしい」

僕は先生の部屋に通されて、丸い椅子に座らされた。ぐっしより濡

れた服が気持ち悪かったな。

「着替えなくて大丈夫かね？」

先生が訊いた。僕は大丈夫だと答えた。

先生は僕の正面に座って、すごく深刻な顔をした。そしてこう言ったのさ。

「私は医者だ。私の仕事は患者に正しい知識を伝えることだと私は思っている。これから話すことに私は嘘を吐かないし気休めも言ったりしない。それが医者としての私の信念でもあるし、患者やその家族にとっても大切なことだと思っている。キミにはかなり辛いことだとは思うが、どうか受け止めてほしいと思っている。私の話を聞く覚悟はあるかね？」

先生の声は外見と違って優しくかった。けどそれは僕の中で膨れ上がっていく不安を消してくれるものじゃなかった。

そんなこと何で言うんだ？それじゃまるで…。

「美里が、美里がどうかしたんですか？」

声がどうしようもなく震えたね。イヤな予感が頭の中を回っていた。先生は最初少しためらっていたけど、やがて意を決したかのように口を開いた。

「美里ちゃんは今」

病院のベッドで眠る美里を、僕は見ていた。その姿はとても愛らしくて、いつもと同じだった。ただ1つ、腕に刺さった太い点滴の針を除けば。

こんなに、こんなにも穏やかな寝息を立てている美里に、僕は言わなくちゃいけないことがあった。それはとてもとても辛いことで、口にしたり考えたり、思い出したりするのも嫌だったんだけど、僕はそれを美里に、妹に伝えなくちゃならなかったんだ。

先生との会話を思い出していた。

「それって、どういうことですか…？」

僕は間の抜けた声で訊き返した。先生の言葉は認めたくないっていうより、ひどく現実味がない気がしたな。何かの悪い冗談だも思った。僕は先生が笑って、「冗談だよ」って言うのを期待した。

でも先生はこう続けた。

「まだ精密検査をしていないから詳しいことは分からないが、そう見て間違いないだろう。聞いているかね？」

それから先生は美里の症状について色々と話してたけど、僕の頭には、いや、たぶん耳にすらそれは入ってなかったね。先生の言葉を、今となつてはほとんど思い出せないでいるんだからさ。

「しばらくは入院してもらって様子を見るが…。岩海くん、それなりの覚悟をしておいてほしい」

先生の顔は相変わらず暗かった。そんな顔をしないでくれ、頼むから。

僕は言った。

「先生、嘘でしょう…？」

身体は凍えそうなくらい冷たいのに、僕はめっちゃくちゃに汗をかい

ていた。

美里が…死ぬ…？

「岩海くん、キミは」

「嘘だつて言ってください！」

次の瞬間、僕は先生に掴みかかっていた。襟を掴んで乱暴に揺さぶった。

「嘘だつて…、嘘だつて言えよ！」

そんなはずない。美里が死ぬはずない。そんなこと考えたくもない。でもね、無理なんだよ。何も考えたくなくても、悪いイメージばかり浮かんできてくるんだ。止まってくれないんだ。

あんなに、あんなに元気だったのに。あんなに元気だったのに。病気なんて嘘に決まってる。だつて美里はあんなに　　元気、だつただろうか？

暴れる僕を先生は両肩を掴んで止めた。身体は向こうの方が倍近くあったから、すぐに僕は暴れることができなくなった。

「落ち着きなさい！」

人を安心させるような、強くて腹に響く声。先生は僕の目をまっすぐに見つめてきた。

「キミがそんなことでどうするんだ！キミはあの子のたった1人のお兄さんなんだ。キミがうるたえても何の解決にもならない！」

その言葉を聞いて、僕は全身の力が抜けて、床に座りこんだ。ただ悔しかった。そして悲しかった。大声で泣き叫びながら、僕はそこを動かすことができなかった。

余命1カ月。美里の命が永遠じゃなくなった。

僕が病室のドアをノックすると、中から可愛らしい声が、「どうぞ」と返ってきた。美里の病室は個室で、日当りのいい南向きの部屋だった。美里は普通のベッドに寝かされていて、栄養補給のための点滴の管がつながっていた。

「どうだい、調子は？」

「退屈」

そう言つて美里はにっこりと笑った。

僕はそのときまだ、美里に、美里の病氣のことを告知していなかった。いや、できないでいた。だってできるわけないじゃないか。こんなにも幸せそうな彼女に、そんなこと、とても言えないよ。

けど、僕は言わなくちゃならないんだ。残酷なことかもしれないけど、美里はそれを知らなくちゃならないと思うんだ。だって彼女は……。

僕はベッドの横の椅子に腰掛けて、美里の顔を眺めた。恥ずかしいのか、美里は顔を赤らめていた。

「なに？」

「実はな美里、お前に大切な話があるんだ」

何度も何度も言おうとして言えなかった言葉を、僕は言おうと決心した。きっとそれが遅くなればなるほど、美里を傷付けてしまう気がしたから。

「実はお前は」

「知ってる」

美里の言葉に耳を疑った。

「え？」

「私の病氣のこと、私、ずっと前から知ってたよ」

その言葉とは裏腹に、美里は優しく微笑んでいた。僕は何がなんだか分からなくて、声が出なかった。美里は静かに語りだした。

「1年くらい前から風邪みたいなのが全然治らなくて、そのうちお腹とかもどんどん痛くなってきたの。それで母さんに一度病院に連れて行ってもらったとき、私の中に悪い病気があるって分かったの」

美里はここで、ちょっと悲しそうに声のトーンを落とした。

「お兄ちゃん、今まで黙っててごめんなさい。私、お兄ちゃんには知らないでいてほしかった。この病気が見つかったとき、もう手遅れになってたの。だから私、お兄ちゃんといっぱい思い出を作りたかったから、私ね、お兄ちゃんと一緒にいたかった。死んじゃう前に、お兄ちゃんとたくさん、たくさん遊びたかった……」

美里は一呼吸置いて、僕に哀願するような目をして言った。

「母さんを、母さんを悪く言わないで。母さんはきつと、私が痛い治療をたくさん受けるより、お兄ちゃんと一緒にいた方がいいって思ったの。私ね、母さんとたくさんお話して、学校はお休みして、お兄ちゃんのところに来たの。母さんは、私がいると邪魔だからって、お兄ちゃんが嫌がるからって……。それが私にとって1番の幸せなんだって、そう思ったから、母さんは家を出て行ったんだと思うの」

僕は、僕はなんて馬鹿な男なんだろう。美里はずつと、ずつと病気で苦しんでいたのに、僕はそれに気付いてあげることができなかったんだ。なんて、最低な兄貴だ。

「だからお願い。母さんを恨まないで。母さんは、母さんは」
そう言いながら、どんどん美里の声が小さくなっていった。見ると顔中に冷や汗をかいていた。

「おい、どうしたんだ？」

僕は美里の身体に手を置いた。身体が尋常じゃないくらいに震えていた。

「美里！どうしたんだよ！」
美里の表情が苦痛で歪んだ。

「ッ！」

鋭い金切り声を上げて、美里の身体がベッドから跳ね上がった。獣じみた声で呻きながら、ベッドに爪を立てていた。

「ああああああああ！」

狂ったようにのたうち回って、美里は掛けてあった毛布と共にベッドの上から転がり落ちた。荒い息遣いのまま毛布の中で苦しむ美里。声を聞いたのか、何人かの医師や看護婦が部屋になだれ込んできた。

「下がって！」

3人がかりで彼らは美里を押さえつけた。暴れる美里に猿ぐつわが噛まされた。看護婦の1人が引つ搔かれて血を出していた。

その様を、僕は見ていた。何も出来ないまま、無力なまま、そこに突っ立っていたんだ。恐かったんだ。あのときの美里を見て、僕はただ恐ろしくて、1歩だって動くことができなかった。まったく、情けないよね。

今でもあのときの光景を思い出すと、僕は恐くなっちまう。そして、自分の無力さがイヤと言うほど見せつけられるんだ。

次の日、美里はベッドの上でぐっすりと眠っていた。痛み止めと睡眠薬の効果かもしれない。その様子を、僕は横から見ていた。そして前日起こったことを考えていた。

突発的な発作だと先生は言った。この世のものとは思えないような激しい痛みが全身を襲うそうだ。タチの悪いことに、この発作はいっ起こるかが予想できない上、体力の落ちている美里には命の危険があるということだった。次の発作に耐えられるかどうかの保証はない。先生はそう言った。

「あんな小さな子がこれほどの苦しみを、たった1人で何ヶ月も耐えてきたなんて……」

先生の言葉は、僕の胸に突き刺さった。誰もいない部屋の中で、たった1人で発作に耐える美里の姿が浮かんだ。

美里は、ずっと僕にサインを送っていたんだ。ばれたくない、心配をかけたくないって思いながらも、彼女は見えないサインを送っていたに違いないんだ。僕はそんな彼女の必死のサインに気付いていながら、結局何もしなかったんだ。忙しいとか疲れてるとか、そんな言い訳ばかりして何もしようとはしなかったんだ。どうしようもない、救いようのないやつだよ、岩海圭介って奴はさ……。

ベッドで美里がうつすらと目を開けた。薬が効いているせいかな、ぼんやりとしていた。

「お兄……ちゃん……?」

「美里、大丈夫か?」

「お兄ちゃん、ごめんね……ごめんね……」

畜生。謝らなきゃいけないのはこっちの方だったのに。

「ごめんな美里。お兄ちゃん、何もできなかった……。本当にごめん……」

美里は何も言わなかった。美里は僕を、きつと許さないだろうな。

「お兄ちゃん、何か、お話して…」

唐突に美里が言ったので、僕は戸惑った。

「え、お話？」

美里は赤面して、「うん」と頷いた。

「お話か…」

僕は必死に、美里に聞かせる話を考えた。考えて考えて、僕はあることに気が付いた。

僕は何も持っていなかった。美里に聞かせてあげれるような、病気の妹を勇気づけてあげれるような話を、僕は1つも持っていなかったんだ。本当に、1つもだよ。それに気付いて、僕は泣いてしまった。18年も生きてきて、僕には何にもなかったんだ。妹のささやかな願いすらも叶えられないような人間だったんだ。

そんな僕の頬に、何か温かいものが触れた。美里の小さな手のひらが、僕に伸ばされていた。

ああ、いつも僕は美里に助けられてばかりだな。あの子は、僕の心の支えなんだ。こんなにも救えない僕を、彼女は救ってくれるんだ。そつえば、いつかこんなことがあったな。

僕は夢を見たんだ。ひどい夢さ。部屋の中で僕と母さんが怒鳴り合っている夢。母さんが部屋を出て行った後、僕は部屋の中を見回した。部屋の隅で小さな女の子がぬいぐるみを抱えて震えていた。まだ小さな頃の美里だった。僕は美里を呼んだ。おいでって何回も呼んだ。けど美里は動かないんだ。僕の方を、その大きな瞳を見開いて、怯えながら見ているんだよ。そんな目で見つめないでくれ。そんな目をしないでくれ。僕は夢の中で何度も叫んだね。まるで美里が遠くに行ってしまうような気がしてさ。待って美里。僕を置いて行かないで。

目が覚めて、僕はベッドから飛び上がった。飛び出してきそうな心臓を押さえて、僕は肩で息をしていた。

「どうしたの？」

美里が眠そうに目をこすりながら訊いてきた。僕はそんな美里を強く抱きしめて、何度もそこに美里がいることを確かめたんだ。美里は驚いていたけど、やがて僕の背中にそっと腕を回してくれたんだ。そしてこう言ってくれたんだ。

「大丈夫、私はここにいるよ…」

その夜が、もう何十年も前のような気がしてならない。

僕は美里の伸ばした手のひらを自分の手のひらでそっと包んだ。今にも壊れてしまいそうな細い指。でも、ちゃんと生きていて、温かい指。

「私、お兄ちゃんのそばにいたい。それだけで、それだけでいいの。ずっと、私のそばにいて、手を握っていてほしい…」

ベッドの上で、余命1カ月の少女は優しく笑った。これじゃ本末転倒もいいとこさ。僕が逆に、美里に勇気づけてもらうなんてさ。

僕たちは何も言わず、長いことそうしていた。ずっと続くわけがないなんて思っただけでも、僕たちはそれをやめられなかった。

ある日の午後、美里は僕に訊いた。病室の昼下がりがだった。

「ねえお兄ちゃん…」

「ん？」

「人は死んだら、どうなるのかな…」

それは普段なら他愛もない質問かもしれない。でもこの状況でその質問は、重すぎるよ。

「そんなこと…」

そんなこと言わないでほしかった。美里の口から、「死ぬ」なんてでも僕は、それにちゃんと答えることにした。

「決まってるじゃないか。また新しく生まれ変わるのさ」

美里は、「そうだよね」って笑った。

「お兄ちゃんは生まれ変わったら何になりたい？」

僕はしばらく考えた。それまで1度もそんなこと考えたことなかったんだからさ。

「僕は、僕は生まれ変わったら風になりたいな」

「風？」

「そう風さ。誰のことも気にせずに、誰からも気にされずに、自由に空を舞う風になりたいんだ。自分の好きな所に行ったりしてさ。

きつと気分がいいぜ。でもね、時々誰かが、例えばキミのような子が、僕に気付いてくれるんだ。そして僕を感じてくれて、僕を励ましてくれるんだ。そう風だよ。僕は風になりたいんだ」

自分でもよく分らなかったけど、僕はそう思ったんだ。

美里はそれを聞いて、「素敵…」と言ってくれた。

「私は…」

美里はそう言いかけて口をつぐんだ。

「私は、私はね、生まれ変わったら、お兄ちゃんの妹にはなりたくないな…」

彼女はそう言った。僕は軽くショックだったね。いやごめん、かなりショックだったよ。

美里は顔を真っ赤にして、口元にいたずらっぽい笑みを作った。

「私ね、生まれ変わったらお兄ちゃんの」

コンコン、とノックの音がした。看護婦さんが頭をひょっこり出して、

「圭介くんにお客さんよ」

と言った。

「はい、ありがとうございます」

そう言つて、僕は席を立とうとした。けどその前に、

「えつとごめん、なんだっけ？」

美里は顔を毛布に隠して小さく答えた。

「ナイシヨ」

僕は病院の待合室に向かった。誰が来たのかさっぱり見当が付かなかったけど、待合室に着いたとき、僕はハツとした。

待合室には1人の女子高生がいた。小柄でおとなしそうなその姿を、僕が忘れるわけもなかった。

岸本沙織がそこにいた。

病院の中庭は噴水やら芝生やらがあつてちょっとした公園みたいな
雰囲気のところだった。大きな木なんかも植えられていて、その下に
ベンチがあつた。僕と岸本さんはそこに座つた。

長い、本当に長い沈黙のあと、僕は、「ごめん…」と彼女に詫びた。
けど僕が彼女にしてしまったことを考えると、なんだか謝ることす
らも悪いような気がしたな。僕はきつとその場で自殺して、死を持
つて償うべきだったのさ。そのくらい、僕のやったことの罪は重
いと思ふんだ。岸本さんはいつもみたく弱々しい声で、「うん…」と
答えただけで、また黙つちまつた。

普段は誰も気にしないけど、空気にも質量があるんだ。そのことを
改めて感じる事ができたね。ついでに酸素のせいかな、何かが肌
に突き刺さっているみたいだった。

空は気の滅入るような快晴だった。やっぱり、空の色が青つてのは
おかしいと思ふんだ。せめて曇つててくれればいいのにつて、そう
思つた。

「アインシュタイン…」

隣で小さな声がして振り向いた。

「なに？」

「岩海くん、前私にこう言つたわ。俺はただのアインシュタインと
友達になれるつて…」

岸本さんはクスリと笑つた。

「ああ…、そんなこと言つたね。確か物理の時間だったかな？」

そんな日もあつたな。まだ僕が彼女と隣同士の席だったころ。もう
あれから5000年は経っている気がした。

キミはアインシュタインつて科学者を知ってるだろ？相対性理論や
らなんやらを発見した天才物理学者さ。物理の教科書に載つていた
彼の写真を見て、僕はこう思つたんだ。もしアインシュタイン博士

が天才じゃなかったら、彼はどうなっていたんだろうって。もし彼が平均的な頭脳を持っていた、なんとか理論を発見したりしていなかったら、彼はここまで有名にはならなかっただろうね。それどころか、友達なんかもできなかったんじゃないかな。僕はアインシュタインの専門家じゃないからあまり詳しくないんだけど、彼ってかなりの変人なんだろう？写真を見ても頭はモジャモジャで舌なんか出していて、どう見たって奇人変人さ。これで彼が天才じゃなかったら、果たして彼に友達はできたんだろうか？僕はできなかったと思う。みんなは人を見た目で判断して、すぐに見限っちゃうからさ。彼はたまたま天才物理学者で、たまたま相対性理論を発見したから、みんなが興味を持って近付いて来たのさ。

でも僕は違う。僕はきつと彼が天才じゃなくても、彼が相対性理論を発見しなくても、彼の友人になろうって思うと思うんだ。根拠なんてないけど、僕はそう思うんだ。たぶん、なんとなくだけど、僕と彼は似ていると思うんだ。学力とか見た目とかじゃなくて、中身がさ。

だから僕は岸本さんに言ったんだ。「俺はただのアインシュタインと友達になれる」ってね…。

僕がそんなことを思い出していると、隣で岸本さんは静かに笑った。「私ね、岩海くんのその言葉を聞いて、この人はなんていい人なんだろうって、そう思ったんだ…。可笑しいよね。でもそう思ったんだから仕方ないの。この人ならって…。だから、だから…」

話をしながら、岸本さんの声は消えていった。僕はいたたまれなくなった。僕はいい人なんかじゃない。そんなんじゃないんだ。

岸本さんは2人の間の沈黙を払うかのように、話題を変えた。

「妹さんの具合、どう…？」

「うん…。美里の奴、日に日に悪くなっていってる。身体もすっかりやせちまって、毎日点滴を打たれてるんだ…。あと1カ月持つかどうか分からないんだ」

岸本さんが息を呑むのが聞こえた。そこまでは聞いていなかったら

しい。

「ごめんなさい。私…知らなくて…。ただ入院しているとしか…。
ごめんなさい…」

彼女は目に涙を浮かべていた。その涙はきつと、僕と美里のために流された涙だったんだと思う。

「気にしないでいいよ。俺、もう覚悟はできてるから…」

とっさに嘘をついてしまった。覚悟なんてできてない。覚悟ができているのはきつと美里の方だ。あの子はまだ小さいから自分が死んじやうことをうまく理解してないだけかもしれないけど、僕よりずっと強い子なんだ。少なくとも美里は、自分の境遇を嘆いてはいない。

「…僕、あいつとはずっと離れて暮らしててさ。2年くらいかな、1度も会わなかったのは。それで4月に僕がこの高校に入ったとき、美里が僕の家に来たんだよ。あんときは驚いたなあ。いきなり何の前触れもなくやって来て、『ここで暮らす』だったさ。週末の度にどっかに出掛けたりしたんだ。本当に可愛い妹でさ、僕なんかよりずっと、ずっといい子だったんだ…」

岸本さんは僕の告白を静かに聞いていた。

「僕はね岸本さん、ひどい奴なんだよ。岸本さんが思っているほどいい人間じゃないんだ。僕は人が信用できなかった。母親に

はいつも殴られてたし、友達には中学のころに…。中3のときね、金山って友達がいじめに遭ってたんだ。僕は金山をいじめていた奴らが大嫌いになった。金山を不登校にまで追い詰めた奴らに我慢がなかったんだ。だから僕は、友達なんか信用できない、そんなのいらないうって思ったんだ。でも、それは違うんだ」

僕は自分が泣いているのに気付いた。うまく喋れなかったけど、僕は構わず続けた。

「僕が、僕が本当に嫌いだったのは、本当に1番許せなかったのは、僕自身だったんだよ…。僕は金山が不登校になってもあいつの家に行くことしなかったし、自分であいつを助けてやろうともしなかった

たんだ。その上、今まで友達だった奴らに責任を全部押し付けて、勝手に嫌いになって、自分を守ろうとしていたんだ。僕は悪くないって思い込もうとしたんだ。…こんなの最低だ。1番悪いのは僕なんだ。いろんな人を傷付けて、そのくせ自分が被害者面してたんだ。でもそれを認めたくなくて、だからいろんなものを嫌いになって、その度に自分を嫌いになって…。けど誰かに頼らなきゃ生きていけなくて、八つ当たりして…。逃げてたんだ。僕は人から、自分から逃げてたんだよ…」

まったく情けないね。病院の中庭で、僕は人目もはばからずにワンワン泣いてたんだから。でもそのときの僕の言葉に、嘘はなかった。嘘があるとすれば、それは…、

「でもね、そんな僕にも好きなものはあったんだ。心の底から好きだっけと思えるものがさ。美里とか、田尾先輩とか、岸本さんとかがね。全部嫌いになってしまおうと思っても、嫌いになりきれないんだ。いつも心のどこかで、自分を認めてくれるもの、自分を許してくれるもの、自分と似たものを探してるんだ」

このとき僕は、どうして自分が学校に行くのかが分かった気がした。確かに世の中は憂鬱で気の滅入ることが多いけど、中には、そうごく稀に、僕の好きなものがあるんだよ。それに会いたくて、僕は学校に行くんだ。

気付くと、岸本さんは僕の手を握っていてくれた。涙ぐんだ笑顔でそこにいてくれた。なんだか、「大丈夫だよ」って言われているような気がして、とても嬉しかったな。

「夏休みが終わったら、また学校に来てね…。私、待ってるから…。2人でベンチから立ち上がった。青い空がちょっとだけ、いいもののように思えてきていた。

「美里ちゃん、きつと大丈夫だから…」

「ありがとう…」

そのまま僕は彼女に背中を向けて別れようとした。けど別れる前に、僕は岸本さんに振り返って言った。

「彼に：すまなかつたって伝えてくれないか？」

「分かった…」

僕は歩き出した。後ろで岸本さんが泣いているような気がしたけど、僕は振り返らなかった。

病室に帰る途中で見た鏡には目を赤くした僕が映っていた。すぐに泣いちゃうのは僕の悪い癖かもしれないな。涙もろいって言うより、ヒステリックなんだよ、僕は。

そんな目を水で洗って冷やしてみてもなかなか赤みが取れなかった。あきらめて病室に入ろうと思ってドアに手を掛けたら、中から声が聞こえてきた。僕は反射的にドアノブから手を離し、聞き耳を立てた。

「美里ちゃん、体調はどう？」

「はい、今日はいつもよりいいみたいです」

「それはよかった。はい、これおみやげね」

「わぁキレイ。ありがとうございます」

どうやら大家さんと美里みたいだった。後ろめたさを感じつつも、僕は2人の会話を盗み聞きした。

「本当にごめんなさいね。私、全く気付くことができて…」

「そんな…、悪いのは私なんです。私、みんなにずっと嘘ついてたから…」

「美里ちゃんは優しいのね…」

「…大家さん、私ね、本当に悪い子なんです。みんなに嘘ついて、迷惑ばかりかけて…。お兄ちゃんも、私といると迷惑だったのかな…」

「そんなことないわよ。美里ちゃんはちつとも悪くない。…圭介くんだって、とても嬉しそうにしていたわ」
なぜか、僕に言っているみたいだった。

「私、お兄ちゃんといて幸せでした。生きてきた中で、1番幸せでした。もう、何の後悔もないんです」

「…美里ちゃん、もう嘘をつかなくてもいいのよ」

「私、嘘なんか…」

大家さんが美里を抱きしめたような気がした。

「本当に、もう無理をしなくていいのよ。泣いてもいいの。美里ちゃんには1人で頑張つて来たんだから、ここで泣いてもいいのよ……」突然、決壊した堰みたいのに、美里が泣きだした。声にならない声で、美里は叫んだ。

「私……死にたくないよおお！」

ずっと抱えていた、美里の本音だった。彼女はずっと苦しんでいたんだ。でもそれを僕たちに気取られないように、たった1人で隠していたんだ。10歳の女の子は、ずっと死の恐怖と戦っていたんだ。クソ。僕はとんでもない誤解をした。僕は彼女が、自分の死を受け入れているのだとばかり思っていた。けど本当は違った。そんなこと当たり前なんだ。彼女は僕たちのために、強くなくちゃいけなかったんだ。本当は泣きたくて仕方なかったのに……。

美里は泣き疲れて眠ってしまったようだった。病室から出てきた大家さんに、僕は深くお辞儀をした。

病室の前の椅子に僕たちは座った。大家さんからもらった缶コーヒーを少し飲んでから、僕は大家さんに言った。

「すみません、いろいろと迷惑掛けちゃって…。それと、さっきはありがとうございました…」

それから僕は、前日に起こったある出来事を、心に支えていたものを大家さんに話した。

「実は、手紙が、来たんです。母からの手紙でした。…まだ恐くて読めないんです…」

大家さんは、「そう…」とだけ答え、缶コーヒーに口を付けた。

「ひどい母親でした。僕をいつも殴ってて、ろくに世話もしないで、いつも怒鳴ってました。僕はそんな母が嫌いでした。美里が来たときだって、母を本気で殺したくもありませんでした。けど、不思議なんです。そんな母親からの手紙なのに、捨てられないんです。正直、手紙が来て嬉しかったんです…」

美里は母さんを恨まないでほしいと言った。母さんには相談できる相手がいなかったんじゃないだろうか？もしかしたら母さんはたった1人で、自分の娘の病氣と闘ったのではないだろうか？そして美里を僕に託すことが、最良の方法だと思ったんじゃないだろうか？大家さんはそしてしばらく考え込んだあと、正面の壁を見つめながら言った。

「昔ね、私にも娘がいたの。そうね、生きていればちょうど美里ちゃんくらいかしら。その子が亡くなったとき、私は思ったの。私はきちんと、正しくあの子を愛せたかなって。あの子の母親になれたかなって。ずっと自分に問い続けても、結局答えは出なかったわ…」
大家さんは指先で指輪を回していた。ひどく悲しい、遠い目をしながら。

すると大家さんは僕に腕を伸ばし、僕の頭を抱きかかえた。僕は抵

抗しなかった。大家さんからは、甘くて、とても懐かしいにおいがしたな。それがなんなのか、僕は知っているような気がした。

「圭介くん、あなたがお母様を嫌っているのは知ってる。でもね、これだけは覚えていて。人を育てるのに、正解も不正解もないのよ。それぞれが愛する者のために必死に考えてやったことに、間違いなんてないの。お母様は圭介くんを愛しているわ。子を愛さない親なんかいらないのだから。ただ、どうやって愛すればいいのか分からないだけ……」

泣かないって決めたつもりだった。けど、無理だよね。どんなに我慢しても、涙つてのは次から次へと溢れてきて止まらないものなんだからさ。母さんのおいに包まれながら、僕は子どものみたいに泣き続けた。

来てほしくないって思っけていても、時間は勝手に進んでいく。それは残酷かもしれないけど、きつと抵抗することはできないんだ。そして、ついにその日は来た。

夜、美里の病室に僕はいた。美里の症状はどんどん悪化していて、もはや口をきくのも億劫そうにしていた。僕はベッドの横に座り、彼女の手を握っていた。

「お兄ちゃん……」

弱々しい声。

「ん？」

「連れて行つてほしい場所があるの……」

僕は知っていた。それがきつと、美里の最後の願いなんだって。

「……分かった」

僕は美里をおぶつて病院を抜け出した。先生も看護婦さんも、誰も何も言わなかった。バイクの後ろに美里を乗せ、病院を出発した。バイクに乗っていると、イヤなことを全部忘れることができたんだ。でもそのときばかりはそういかなかったな。街の中を美里と一緒に走りながら、僕は何か虚しくなつちまった。街にはこんなにもたくさんの人間がいるのに、誰も僕や美里のことを知らないんだ。みんなそれぞれ好き勝手に生きている。でもこれは僕にも言えることだよ。僕だって、彼らがどんな人間で、どんな人生を歩んできたのか知らないわけだからさ。

しばらくして僕たちはある場所にやつて来た。美里が最後に望んだ場所は、2人で花火を見たあの川原だった。

「あそこ……」

美里が指で示した方に行つて、そこに座った。美里は僕に膝まくら

されて、川の方をぼんやりと眺めていた。

辺りは、とても静かだった。僕たち以外は誰もいなくて、聞こえてくるのは遠くを走る電車の音だけだった。

「お兄ちゃん、ありがとう…」

妹が呟いた。

「私、とても幸せだったよ。お兄ちゃんという、本当に…。今だつて、とても幸せ…」

「美里…、無理をしなくていいんだ。怖いなら恐いって言うていいんだよ…」

僕がそう言つと、美里は僕を見上げて、すごく柔らかな笑顔で言うんだ。

「お兄ちゃん、私、今までたくさん嘘をついてきた。けどね、これだけは嘘じゃないよ。私は今、とっても幸せなの。お兄ちゃんと一緒にいれて本当によかった…。ありがとう、お兄ちゃん…」

風が吹いていた気がする。草とか川とか、空気のおいがしてた。電車の音が離れていった。

僕は美里の頭を優しく撫でた。美里は気持ち良さそうに目を細めて、「見てお兄ちゃん、星がキレイだよ…」

僕は夜空を見上げた。月の無い夜、空は満天の星空だった。それがなんて星座の、なんて星なのか知らないけど、すごく綺麗だったな。あの星の光はきつと、何十万年もかけて地球に届いたんだろうな。そんなことを考えると、自分がいかにちっぽけな存在なのかって実感するんだ。でも、どんなにちっぽけでも、僕は生きているんだよ。すごく孤独で、気の滅入るようなことばかりの人生でも、100回のうち1回くらいは、きつと幸せなことが起きるんだ。僕はその1回のために、生きていけると思う。だって、僕の心の、美里と触れ合っていたところが、まだほんの少し、温かいような気がするのだから…。

電車の音が聞こえなくなつて、僕の耳に聞こえるものは何もなくなつた。僕の心は不思議なくらい穏やかだった。それはたぶんきつと、

そのときの光景が、星空や美里や川原なんかが、どうしようもなくキレイだったからなんだろうな。こう言つと安っぽく聞こえるかもしれないけど、本当にキレイだったな。本当に、夢のようだったんだ。

僕はいつまでも星空を見上げ続けた。ただ、風だけが吹いていた。

35（後書き）

あとがき

最後まで読んでいただきありがとうございました。

拙い文章で読み辛いところもあったと思います。

これからも精進を重ね、よりよい作品を作っていきたいと思います。
できれば評価の方をよろしく願います。

本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802d/>

今夜、風の吹く場所で

2010年10月10日01時14分発行